

手元資料

資料① 映画『1923』について

【映画の解説】

イントロダクション

忘れられた歴史を伝えるための希望の行進は続いていく -
1923年9月1日、関東大震災によって関東地方一帯が大きな被害を受けた直後、日本国内では混乱と恐怖の中で、根拠のない流言「朝鮮人が暴動を起こす」というデマが広がった。

本作は、その震災直後に起きた、在日朝鮮人への集団的暴力・虐殺、すなわち関東大虐殺の実態を、日韓両国での膨大な取材と、新資料の検証を通じて再構成し、暴力がどのようにして起きたのか、誰が加害者だったのか—民間の自警団、警察、軍など関与の構図を明らかにするとともに、犠牲者はなぜ「異民族」あるいは「外国人」とみなされ、命を奪われたのかを描き出される。

さらに、101年以上もの間、なぜこの「大虐殺」の事実が公の歴史としてきちんと扱われてこなかったのか、なぜ隠蔽あるいは見過ごされてきたのか—その背景にある差別意識、権力構造、歴史認識の問題にも迫り、被害者の遺族や市民活動家、研究者たちの声を通じて、「忘れ去られた真実」を掘り起こしていく。

犠牲者数「約6,661人」とされるこの事件を、「歴史の闇」として扱うのではなく、後世へ継承されるべき記憶とするための鎮魂のドキュメンタリーが誕生した。

主な登場人物

鳩山由紀夫／元総理
杉尾秀哉／国会議員（立憲民主党）
榊原万里／国会議員（れいわ新選組）
リー・ジンヒ（イリノイ大学博士） 関東大震災 朝鮮人虐殺に関して世界初の博士論文資料集製作
平形千恵子（千葉県実行委員会）
チョン・ソンギル（啓明大学 歴史考古学科 客員教授）
有田芳生（元 国会議員）
西崎雅夫（市民団体「ほうせんか」理事）
鈴木淳（東京大学 教授）

監督プロフィール

監督:キム・テヨン 김태영 KIM Tae-yeong

1958年生まれ。映画監督。これまでに製作/監督として6作品に参加しており、代表作に、2023年の映画『1923 関東大虐殺』（監督・製作）、映画『荒地 5月の告白』（監督）などがある。

近年、歴史的事件を扱う重厚なテーマにも挑戦しており、韓国映画界の中で独自の作風と社会的関心を併せ持つ監督の一人。

<FILMOGRAPHY>

2023年 「1923 (1923 간토대학살)」 監督・製作
2021年 「チャン・ドンゴンバック・トゥ・ザ・ブックス」 演出・製作
★第54回ヒューストン国際映画祭 フィルム・ドキュメンタリー部門プラチナレミー賞(最高賞)受賞
2020年 「荒地 5月の告白(황무지 5월의 고해)」 脚本・監督・製作
2019年 「光化門(광화문)」 脚本
2016年 「デイルクシャ(딜쿠샤)」 脚本・監督・製作・出演
2002年 「2009 ロストメモリーズ(2009 로스트 메모리즈)」 製作
1988年 「荒地 황무지」 脚本・監督・製作
1988年 「ミスター・カントの発表会」 脚本・監督・製作
★第38回ベルリン国際映画祭 Forum ★第6回トリノ国際映画祭



制作スタッフ

監督:キム・テヨン、チェ・ギョソク
ナレーション:キム・ウィソン
('模範タクシー'、'ソウルの春')

2024年|韓国映画|
原題:1923 간토대학살|
英題:1923 Kanto Massacre|
113分|
製作:インディコム、スタジオクラス
配給:スモモ

映画『1923 イチ・キュー・ニーサン』 上映会 問合せ先

- 自主上映会のお問合せは
下記メールアドレスか携帯電話へお願いします。
- スモモ
MAIL:inc.sumomo@gmail.com
TEL:03-6450-5867 (木下・長岐)

資料② 映画『1923』監督・出演者インタビュー（1）

「関東大虐殺の真実を全世界に知らせたいんです」

金台榮(キム・テヨン) 監督

ドキュメンタリー『1923』を制作することになったきっかけは何でしょうか。

日韓近代史関連の写真蒐集家であった鄭(チョン)成吉(ソングル)先生と親しかったんですが、ある日私に見せてくださった1枚の写真が、このドキュメンタリーの始まりでした。「横浜大地震 1923年 9月1日」という英文のタイトルがついた小さなフォトアルバムとともに、ジョージ・ロス英国海軍少将が撮影した写真(推定)を見せてくれたんです。写真の中の虐殺場面を見て大きな衝撃を受けました。「この写真がどうしてこれまで世に知られることがなかったのか」という思いが脳裏から離れなかったんです。関東大震災の後、数多くの朝鮮人が殺害されたという事実は知っていましたが、「そんな悲劇が一体なぜ起きたのか」という疑問が生まれてから歴史の真実をきちんと追跡してみようと決意しました。

—4年間の撮影の間、様々な紆余曲折があったことと思いますが、どんなことが一番大変だったのでしょうか。

防衛省の防衛研究所の撮影がいちばん大変でした。まず撮影する軍関係文書資料を事前に関覧申請すると、それから一か月以内に審査を経て許可が降りることになっていますが、閲覧内容を確定するのが実際には簡単ではありません。何しろ膨大な資料ですから、砂漠で針を探すと言ってもいいようなことでしょう。閲覧許可を受けてから、実際に軍資料を撮影する内容を特定して、もう一度撮影申請をして審査結果を待つというプロセスを経ると、結局防衛研究所の撮影は6カ月かかってしまいました。

ドキュメンタリーの中では、防衛研究所の資料以外にも初めて発掘し公開された資料もありますね。

ドキュメンタリーを制作する過程で、一つ一つ紹介したいほどの多くの資料を発見しました。防衛省 防衛研究所で撮影した「戒厳軍第15連隊が朝鮮人を銃殺した軍の報告書資料」、東京公文書館で発見した「関東戒厳司令部詳報 第5巻の切り取られた第11章」、藤岡歴史館で見つかった「自警団の弁護士費用を町で負担した領収書」などは日本政府が虐殺を扇動したという明白な証拠です。また当時埼玉の染谷村の区長であった高橋吉三郎の手帳なども初公開の資料ですが、一つ一つがすべて重要なものだと思えます。膨大かつ多様な発掘資料が証言と一体となって、関東大虐殺を恣にしてから100年もの間、徹底して隠し通してきた国家犯罪の歴史的な真実を明らかにすることができたと思います。

ドキュメンタリーのエピローグのように、立教大史学科教授を務められてきた山田昭次先生のお姿を映像に収めました。

山田昭次教授は歴史をきちんと知り、必ずそれを教訓とすることを提案されましたね。数十年の間、日本社会に関東大虐殺の悲劇的な歴史は「国家犯罪」だと叫び続けた日本の本当の良心だと思います。様々なルートを通じてお願いをしてきましたが、残念ながら返事をいただけないまま2年が経過しました。その後山田教授の長女にあたる方からメールで連絡をいただき、日本の国会での特別上映会の前日である5月12日に面会が実現しました。その場面を最後に挿入することで、ドキュメンタリーの掉尾を飾ることができました。

—『1923』を通じて究極的にはどのようなメッセージを伝えたいとお考えですか。

ドキュメンタリーを制作している間、「歴史を忘れた民族に未来はない」という言葉が一層切実に胸に迫ってきました。



1923年9月1日、関東大震災の後に起きた関東大虐殺を子々孫々に至るまで民族の記憶として伝えることが義務だと考えています。このドキュメンタリーを通じて、日本の中心部で起きた「朝鮮人ジェノサイド」を全世界に伝えようと思います。国連人権委員会や国連総会でぜひ上映したいと思います。究極的には日本政府の誠意ある真相究明と6,661名の朝鮮人(韓国人)の遺族に謝罪と賠償を求めます。

「“関東ジェノサイド”は日韓の歴史をこえて、世界史に大きな反響を巻き起こす重要な教訓を残しています」

クリエイティブ・プロデューサー

リー・ジンヒ(イースタンイリノイ大学 教授)

—完成したドキュメンタリー『1923』を見てどう感じられましたか。

様々な虐殺の現場に分散していた種族抹殺型の大虐殺としての、関東ジェノサイドの証拠を集成したところに意味があると思います。ドキュメンタリーの製作陣が、100年ぶりに関東大虐殺の真実を、大衆に広く紹介することができたという点は言葉では言い表せない感動です。

さらに日本がこれまで隠してきたコリアン・ジェノサイドという歴史の全貌を明らかにしつつ、これを世界史の重要な教訓にしようとする作業が「ようやく始まる」という思いがこみ上げてきます。

ドキュメンタリーに登場するたくさんの重要な文書は教授が提供下さいました。

歴史を否定する勢力の歴史隠ぺい作戦の中で彼らが見逃した重要な真実があります。数十万人もの人たちが見聞きした虐殺の実態は知らないふりをしたとしても、事実がなくなってしまうことはないという点です。虐殺に抗議した大韓民国臨時政府や韓人団体、さらに良心的な日本の知識人や活動家たちが日本政府に答えを迫る時、必ず返ってくる返事は「関連資料が見当たらない」

「あったとしても真偽のほどが明確でない」、はなはだしくは日本の当時の司法が行った自警団に対する裁判書類でさえ「事実として認定できない」というものでした。つまり日本国内の資料は何が何でも隠し通すという意図に他なりません。

(次ページに続く)

資料② 映画『1923』監督・出演者インタビュー（2）

しかしながら彼らが忘れていた事実は1923年9月、当時虐殺の中心地だった東京や横浜は船舶で国境を越えて移動する当代の重要な国際港であったことで、数万人の外国人が虐殺を目撃した後、それを証言し記録に残したという点です。したがってこのドキュメンタリーを通じて初めて公開される西洋人たちの証言、新聞報道、各国大使館や領事館の記録、世界屈指の銀行や企業の日本事務所、宣教団体等による記録までも隠しおさえるものではないということですね。映画で紹介している米国やヨーロッパの証拠資料は現存する証拠のうち、ごく一部であるにすぎません。今後、外国人の中でも最大多数の目撃証言者を有する中国国内に残る公文書や証言報道、記録などがさらに活発に紹介されるようになれば、歴史的証拠の分量は日本政府が国内の資料を最後まで隠したとしても、それよりはるかに膨大なものにならざるを得ません。

—『1923』は今年の5月に日本の国会（東京 参議院議員会館）で試写会を行いました。

日本の国会での試写会は忘れられないできごとでした。虐殺の起きた地域で数十年にわたって真実を明らかにするため弛みなく努力を続けてきた市民団体の元老の方たちが見せた涙、遺族の皆さんが流した涙の一筋一筋が胸に刻み込まれています。世界各国から日本に留学している若い学生たちが試写会にボランティアとして加わることで示した、真理探究の情熱と強い関心もまた深く印象に残っています。

—『1923』が韓国での公開に続き日本でも公開を準備しています。映画を見る観客に向けたメッセージがあったらお聞かせください。

1923年の関東大虐殺直後から今に至るまで、このジェノサイドに対する徹底した隠ぺい政策の結果としてこれまで100年の間、朝鮮人による犯罪だという誤解を生み、その間ずっと騙されてきました。朝鮮人だという理由だけで幼い子どもや若い女性、お腹の中の胎児までも虐殺の犠牲となる理不尽に甘んじなければならず、彼らに「不逞朝鮮人」という犯罪者の汚名まで着せたまま見て見ないふりをしてきた事件でした。↗

当時、（映画を通じて知ることができる）欺瞞に満ちた戒厳令布告、「朝鮮人の暴動」という政府の虚偽発表、虐殺後の隠ぺい工作の全貌が明らかになっていたら、日本帝国が関東大震災後に治安維持法を実施し、天皇の軍隊を軸とした軍国主義へとなだれこむ歴史の転換点で、別の選択をすることもできたのではないかと考えてみます。この映画を通じて、ジェノサイドの発生原理や完全犯罪をねらった100年にわたる隠ぺい工作の過程について学べる機会となればいいと思っています。そして同じような民間人大量虐殺の前兆が地球の至るところに現れているとしたら、手遅れになる前にそれに気づいて防ぐことのできる慧眼を合わせて持てるようになることを願っています。

SYNOPSIS

朝鮮人に襲いかかった大虐殺

101年間、過去を否定してきた日本政府

1923年 9月1日、関東大震災の直後

日本政府は朝鮮人が暴動を起こそうとしているというデマを広めて戒厳令を宣布し無辜の朝鮮人を無残に虐殺し始めた

人類の歴史に類を見ない反人倫的な犯罪でありジェノサイドであった虐殺事件
そして101年の間、この事実を認めない日本

鳩山由紀夫 元総理や杉尾議員など

日本の政治家、市民団体の関係者、虐殺被害者の遺族まで真実を明らかにするため孤軍奮闘する声に導かれていく
そして英国艦隊の軍人が撮影した決定的な証拠が発見されるが...

ゆがめられた101年、忘れることのできない関東大虐殺
歴史を忘れた民族に未来はない

『1923 関東大虐殺』韓国語版リーフレットより)

資料③ この映画を見て考えたいこと 2

【この映画を見て考えたいこと 2】

「この映画を見て考えたいこと」については、映画会案内チラシにすでに書かせていただきました。

ここでは、その後、手元資料をつくるために調べたことなどをともに、さらに考えたこと、考えたいことを書かせていただきます。

あなたは、1923年の関東大震災の時に朝鮮人、中国人の虐殺が行われたことを、いつ、何によって知りましたか。

自分の記憶をさかのぼって思い返しても、少なくとも高校までの学校ではきちんと教えられていなかったように思います。もし、きちんと教えられていたら「なぜ?」「なぜ?」と次々と疑問がわいてくるはずと思うからです。

いま、この映画を見て、またこの映画をきっかけに調べてみて、湧いてきた疑問をいくつか並べてみます。

- ① なぜ市民が、民間人が、虐殺を起こしたのでしょうか?
- ② その虐殺が、公式の記録に残されていないというのはなぜでしょうか?
- ③ なぜ「虐殺はなかった」という説がまことしやかに今も絶えないのでしょうか?
- ④ なぜ、大地震などの災害が起きると、今でも関東大震災の時のように、「外国人が窃盗を働いている」といった風評・飛語がどこからともなく起きてくるのでしょうか?

①について。その答えを知る手がかりのひとつに、それまでの日本と朝鮮の関係、歴史を知ることがあります。朝鮮半島を侵略し、1910年の日韓併合以降、独立運動に手を焼いた日本政府と軍は、国民に対して周辺民族を蔑み、憎しみを抱かせ

↗そして「いつか暴動を起こすかもしれない」と怖れさせるような宣伝、施策、教育をくり返し行っていました。当時の新聞もこぞってそうした煽り記事を書き立てていました。（①についてはとくに6ページ 資料④を参照下さい）

民間人と言っても、「自警団」という退役軍人が主となった官製の集団で組織的につくられたものでした。日清戦争で、「敵」を殺し、独立を求める人々を弾圧した人たちが担っていました。

②について。侵略の歴史ともども、軍や国家にとっての負の歴史、都合の悪いことは隠すということが一貫して行われてきました。「軍」とは、国家とは厳しい監視をしない限りそうした動きを必ずするもののようです。

③について。不都合な事実を隠して、あるいはそれを公的な問題にさせまいと仕掛けられたトリックです。10ページの資料⑩「虐殺否定論の狙い」を参照下さい。誰が何の目的でそのようなことをしているか考えてみて下さい。

④について。災害時でなくとも、外国人に対する差別や排除、排斥が横行し、無責任で扇動的な情報が垂れ流され、冷静に考えていくことをあざけるかのようです。それが人々が不安の中にいる災害時につけ込みます。8ページの資料⑨「絶望の精神史」を読んで考えてください。

今、戦争に向かう準備が着々と進められ、戦争に反対する声をつぶそうとする体制・施策づくりが組織的に行われています。かつ、根拠のない不安を煽り、敵は誰だとかばりの宣伝が蔓延しつつあります。全ていまの私たちの問題であると考えたいと思います。（S.H）

資料④ 『関東大震災一〇〇年の今を問う』より

『関東大震災一〇〇年の今を問う 虐殺否定・歴史改ざんを許さず』（日本経済評論社 刊）

第1章 日本の植民地支配と侵略の歴史から考える ——戦争・侵略＝植民地支配・暴力の関係性

はじめに——本稿の目的

仮に戦前を明治維新（1868年）からアジア太平洋戦争敗戦（1945年）までだとすると77年間となり、それから戦後だとすると、関東大震災100年を迎えた2023年で78年が経過したことになる。戦後は戦前より長くなったと言うことである。「戦後」と括られる日々が長く続いていると言うことは一見、良いことにも思えるが、「戦後」はいつ「戦前」へと姿を変えるかもしれないし、あるいは「新しい戦前」が始まっているのだという危惧もすでに始まっている。

日本近代史を振り返れば、戦争は「突然始まる」ものではなく、仮想敵国の設定、外敵や「内敵」への憎悪・排斥、軍備拡張の加速などを経て起こることがわかる。これらのうち、外敵や「内敵」への憎悪・排斥ということが、戦争に向かう社会のあり方（戦争肯定の価値観の拡大）を構築していく重要な要素であることは確かである。このように考えると私たちは、戦争そのものの記憶だけでなく、戦争を生み出す社会のあり方についての記憶も、意識的に発掘・継承しなければならないことにたどり着く。

2023年は、関東大震災から100年という節目の年であったが、9月1日を「防災の日」だけでなく「歴史を直視する日」としてとらえ直す必要がある。大震災に伴って起きた歴史上の事実（さまざまな虐殺事件）が隠蔽され、直視されないままに、忘却されつつある今日私たちはどのようにすればそれに歯止めをかけ、確実な歴史認識に到達できるのだろうか。

本稿の目的は、大震災にともなう朝鮮人・中国人・社会主義者等の虐殺事件がなぜ起こったのかを、日本の【戦争】・【侵略＝植民地支配】・【暴力】の関係性の中で考える必要を提示することにある。

+++++

1 日本による戦争と植民地支配

- （1）大日本帝国の戦争の始まり
- （2）日露戦争・韓国併合・大逆事件

2 植民地支配と暴力・戦争の連鎖

- （1）三・一独立運動と日本国内の新聞報道
- （2）三・一独立運動後の新聞報道
- （3）「内敵」概念の形成と関東大震災時の虐殺

+++++

おわりに——国内暴力が対外暴力・戦争へと連鎖

日清・日露戦争以降、戦争が植民地支配を生み、植民地での支配・「植民地戦争」が暴力を拡大し、そういった支配・暴力のあり方が「帝国」本国に持ち込まれるプロセスを概観してきた。この潮流は、これで終わるわけではない。

日本国内に於ける「内敵」排除の論理は、関東大震災を契機に民衆暴力という形で暴発したが、「内敵」排除の論理は1925年には治安維持法の公布という形でシステム化されるとともに、民衆の中でも「異端者」＝「非国民」を排除する相互監視のあり方が次第に強められていくことになる。このような法律に依る支配（縦方向の支配）と民衆の相互監視（横方向の支配）というあり方は、1920年代末以降において戦争を契機に段階的に強められていくことになる。

国内に於ける抑圧の強化が、外側に転じるようになるのは、1920年代半ばにおいて中国において「北伐」が始まり、東アジアの秩序に変動が見られるようになってからである。1927年、日本政府（田中義一内閣）は「北伐」軍の北上阻止を狙って、居留民保護を名目に山東出兵を行った。この出兵にともなう1928年に起きた張作霖爆殺事件は、関東軍による満州占領計画の一部を成すもので、東アジアの秩序の力による現状変更を企図とするものであった。対外膨張の衝動が高まる中で、日本国内においてはまさに同じ時期に、治安維持法の最高刑が死刑に引き上げられる（1928年）とともに、「内敵」である共産党員への組織的弾圧（1928/29年）が実施され、戦争反対勢力への抑え込みが強化された。

世界恐慌の波が日本国内を直撃するとともに「満蒙は日本の生命線」といったスローガンが叫ばれる中で、関東軍は満州事変を起こし（1931年）、翌1932年には「満洲国」を建国させた。満州事変の首謀者であった石原莞爾の東書のイメージは「韓国併合」の再現であった。事変前に石原が期した文書「満蒙問題私見」には、満蒙問題の「解決の唯一方策は之を我領土となすにあり」とし、「期日定め彼の日韓併合の要領により満蒙併合を中外に宣言するを以て足れるとす」としている。

膨張主義の原点はやはり「韓国併合」にあったのである。また、石原は、国内の改造（クーデター）よりも満州占領を先にすることを述べ、その理由として「戦争初期に於ける軍事的成功は民心を沸騰団結せしむることは歴史の示すところなり」と戦争が国民を団結させること、その勢いで国内の障害を突破できることを主張している。実際に、満州事変後の血盟団事件、五・一五事件（1932年）によって戦前に於ける政党政治は急速に弱体化した。満州事変は、事実上のクーデターの役割を果たしたのである。

本稿をまとめよう。戦争は植民地支配を生み出し、植民地に於ける支配・暴力が、それを正当化する価値観、独立運動を敵視する価値観を生じさせる。それは「帝国」本国にも伝播し、貧困・格差・差別など構造的暴力を容認する価値観が定着するとともに、マスメディアなど一方的な情報（報道）によって増幅される。また、「大国」＝「一等国」を維持しようとする価値観は、「内敵」排除の論理を増幅させるとともに、「危機」（緊急事態）に際しては「内敵」に対して敵愾心を高揚させ、時には「内敵」に対する暴力として顕在化させる。

力による支配、「内敵」排除の論理は、対外面でも力による現状変更を容認する価値観を増幅させ、国家を膨張・戦争へ走らせるとともに、国内に於けるテロリズムを横行させる。そして、戦争・テロを民衆が一定程度支持するという構造をつくり出すのである。

書籍『関東大震災一〇〇年の今を問う 虐殺否定・歴史改ざんを許さず』全体の構成

はしがき（鈴木敏夫）

第1部 関東大震災一〇〇年と日本社会の課題

第1章 日本の植民地支配と侵略の歴史から考える——戦争・侵略＝植民地支配・暴力の関係性（山田朗）

第2章 関東大震災時の朝鮮人虐殺と日本軍隊——植民地戦争経験の視点から（慎蒼宇）

第3章 地域的・史料的周縁から考える関東大震災——千葉県震災記念碑を事例として（小園崇明）

第4章 神奈川における関東大震災の歴史実践——学校史料・生徒交流・フィールドワーク（小川輝光）

第2部 虐殺をめぐる真相究明の進展

第5章 加害民衆の論理に迫る方法と課題（藤野裕子）

第6章 朝鮮人虐殺・証言から見えてくるもの——東京における事例を中心に（西崎雅夫）

第7章 関東大震災下の中国人虐殺事件——大島町事件と王希天事件（林伯耀）

第8章 横浜の朝鮮人虐殺（山本すみ子）

第3部 記憶の継承と責任の追及

第9章 埼玉の自警団事件と国家責任（関原正裕）

第10章 中国における関東大震災時中国人虐殺事件の記憶継承と責任追及（鄭楽静）

第11章 在日朝鮮人運動による朝鮮人虐殺の真相究明・責任追及と日本の労働運動・社会主義運動との「溝」（鄭永寿）

第4部 歴史否定をこえて

第12章 「虐殺否定」の系譜を整理する（加藤直樹）

第13章 群馬の森に建立された追悼碑問題について（角田義一）

第14章 小池都知事の式典への追悼文送付取り止め問題（宮川泰彦）

第15章 「明治日本の産業遺産」と産業遺産情報センター（矢野秀喜）

第16章 イギリス外交文書のなかの関東大震災——朝鮮人虐殺否定論の批判的検証を中心に（鄭楽桓）

第17章 関東大震災時の虐殺に関する国会での対応——歴史の抹殺は許されない（藤田高景）

第5部 関東大震災朝鮮人・中国人虐殺100年犠牲者追悼大会実行委員会の取り組み（田中宏、野平晋作、林伯耀、藤田高景）

あとがき——関東大震災一〇〇年からさらなる明日に向けて（鈴木敏夫）

* 関東大震災朝鮮人虐殺がなぜ民間人の手によって行われたか？それを知る為に関東大震災に至る日本と朝鮮半島の歴史を振り返り、またその時期に日本の社会の中でどのように朝鮮人差別が作られていったかを知りたいと思いました。その答えはこの本の山田朗さんの担当章「1 日本による戦争と植民地支配」「2 植民地支配と暴力・戦争の連鎖」に詳しくあります。ここではその前後がどうだったのかの部分を書き出させていただきました。今の我が国の政治と社会を覆っている外国人差別の意味するものと、「戦争への準備」の姿を明確に示すものと思うからです。S.H.

資料⑥ 関東大震災に至る日朝関係史

1874(明治07) 日本軍台湾侵略
1875(明治08) 〈朝鮮〉雲揚号事件(江華島事件) (註1)
 * 日本の本格的朝鮮侵略の糸口に
1876(明治09) 日朝修好条規 朝鮮に強引に調印せまる
1877(明治10) 西南戦争
1879(明治12) 琉球王国へ侵略 琉球滅亡 沖縄県を設置
1890(明治23) 第一回衆議院議員選挙・帝国議会招集
 教育勅語出す
1891(明治24) 田中正造 足尾銅山鉅毒問題を議会に訴え
1894(明治27) 日清戦争 (～1895)
 朝鮮に出兵・仁川に上陸 (註2)
 朝鮮王朝＝景福宮襲撃・占領
 国王の妃・明成皇后を寝所に襲い虐殺 (註3)
1895(明治28) 下関条約 三国干渉
1904(明治37) 日露戦争 (～1905) 日韓議定書締結
1905(明治38) ポーツマス条約締結韓国を日本の保護国化
1906(明治39) 伊藤博文 韓国初代統監に就任
1909(明治42) 伊藤博文ノルピン駅頭で暗殺暗殺
1910(明治43) 韓国併合 (註4) 大逆事件

1914(大正03) 第一次世界大戦参戦 (～1918)
1915(大正04) 中国に21カ条の要求を出す
1918(大正07) 富山で米騒動起こる
 シベリア出兵 (ロシア革命1917)
 原敬の政党内閣成立

1920(大正09) 国際連盟に発足 普通選挙運動高まる
1923(大正12) 関東大震災 朝鮮中国人虐殺
1925(大正14) 治安維持法、男子普通選挙法成立
1928(昭和03) 治安維持法改正 最高刑を死刑に
 張作霖爆殺「事件」(満州某重大事件)
1929(昭和04) 世界恐慌 金解禁の大蔵省令公布
 山本宣治右翼凶刃に斃れる
1931(昭和06) 満州事変
1932(昭和07) リットン調査団満州派遣・撤退勧告
1933(昭和08) 滝川事件・小林多喜二虐殺
1934(昭和09) ワシントン条約廃棄通告
1935(昭和10) ロンドン軍縮会議から脱退ノ
1936(昭和11) 二・二六事件 軍部の力強まる
1937(昭和12) 日中戦争(盧溝橋事件) 南京大虐殺
 日独伊防共協定を結ぶ
1938(昭和13) 国家総動員法成立・公布・重慶無差別爆撃
1939(昭和14) 朝鮮に国民徴用令制定
 ノモンハン事件
1940(昭和15) 斎藤隆夫 衆議院で「反軍演説」
 「創氏改名」を行う総督府令を出す
 日独伊三国同盟ノ大政翼賛会を結成
1941(昭和16) 真珠湾奇襲攻撃 アジア太平洋戦争
1943(昭和18) 学徒出陣始まる
1944(昭和19) 学童疎開始まる ノ特攻隊作戦始める
1945(昭和20) 東京などの大都市への空襲が本格化
 沖縄で地上戦 アメリカが沖縄占領
 アメリカ 広島に原爆投下 (8/6)
 ソ連対日宣戦 (8/8) アメリカ 長崎に原
 爆投下(8/9) 日本 ポツダム宣言を受諾
 (8/14) GHQ設置 連合国軍による占領**1946(昭和21)** 日本国憲法公布 (11/3)

1875 〈朝鮮〉雲揚号事件(江華島事件)

1894 朝鮮で東学農民戦争が起こる

1897 大韓帝国建国, 高宗皇帝即位
1899 中国で義和団戦争始まる (～1901)
1905 孫文ら東京で中国同盟会結成

1910 韓国が日本に「併合」される
1911 辛亥革命がおこる (中国)
1914 第一次世界大戦 (～1918)
1917 ロシア革命 起こる
1918 ドイツで革命がおこり、ドイツが降伏
1919 朝鮮で三・一独立運動 (註5) 起こる
 中国で五・四運動 ベルサイユ条約締結
1920 国際連盟成立 インドで不服従運動広がる
1921 ワシントン海軍軍縮会議
1922 ムッソリーニが政権に就く (イタリア)
1924 スターリンの政治が始まる パリ不戦条約

1929 ウォール街株式市場大暴落 世界恐慌始まる
韓国光州学生抗日運動 韓国元山ゼネスト
1930 ロンドン軍縮会議始まる
1932 イギリスなどがブロック経済をとる
1933 ヒトラーが首相となる (ドイツ)
 ニューディール政策始まる
1935 イタリア エチオピアに侵攻
1936 東北抗日連軍結成
1937 中国で抗日民族統一戦線が結成 中日戦争
 南京大虐殺
1939 ドイツ ポーランド侵攻第二次世界大戦開始
 朝鮮に国民徴用令制定「強制連行」始まる

1940 韓国光復軍創設 朝鮮に創氏改名法令発表

1941 臨時政府が大韓民国建国綱領を発表
 ドイツ ソ連に侵攻
 イギリス・アメリカ大西洋憲章発表
1943 イタリア降伏 (9/8) カイロ会談
朝鮮に学徒志願兵制実施
朝鮮に徴兵制実施 女子挺身勤労令出す
1944 ヤルタ会談 ドイツ降伏 (5/7)
1945 ポツダム宣言発表 (7/26) 国際連合成立
 第二次大戦終結 朝鮮解放
 アメリカとソ連 朝鮮半島北緯38度線で分断
1947 ミソ対立、冷戦の開始 (鉄のカーテン演説)

(註1) 江華島事件 (雲揚号事件) は、1875年 (明治8年) 9月20日に朝鮮の首府漢城の北西岸、漢江の河口に位置する江華島(現仁川広域市江華郡)付近において日本と朝鮮の間で起こった武力衝突事件である。朝鮮西岸海域を測量中の日本の軍艦雲揚号が、江華島、永宗島砲台と交戦した。日本側の軍艦の名を取って**雲揚号事件**とも呼ばれる。日朝修好条規締結の契機となった。

(註2) 日清戦争は、1894年 (明治27年) 7月25日から1895年 (明治28年) 4月17日にかけて日本と清国の間で行われた戦争である。李氏朝鮮の甲午農民戦争を皮切りに、李氏朝鮮の地位確認と朝鮮半島の権益を巡る争いが原因となって引き起こされ、主に朝鮮半島と遼東半島および黄海で交戦し、日本側の勝利と見なす下関条約の調印によって終結した。

(註3) 明成皇后暗殺：乙未事変は、1895年10月8日、三浦梧楼、岡本柳之助らの計画に基づいて、日本軍士官が訓練してきた朝鮮人訓練隊と日本軍守備隊、領事館警察官、大陸浪人ら日本人らが、王宮に乱入し、李氏朝鮮の第26代国王・高宗の王妃であった閔妃が暗殺された事件。閔妃暗殺事件ともいう。

(註4) 韓国併合とは、1910年 (明治43年) 8月29日に、大韓帝国¹⁾を、大日本帝国が廃し、「韓国併合ニ関スル条約」に基づき併合・統治下に置いた出来事を指す。この併合は、約35年間続き、大日本帝国のポツダム宣言による、1945年 (昭和20年) 9月9日に朝鮮総督府による連合国軍への降伏文書調印により実質的に終わった。1965年 (昭和40年)、日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約にて失効した。

(註5) 三・一運動は、1919年 (大正8年) 3月1日に日本統治時代の朝鮮で発生した大日本帝国からの独立運動。三・一独立運動、独立万歳運動、己未独立運動とも。統治領域内での反乱事件とみなす立場から、日本では朝鮮騒擾事件、**萬歳騒擾事件**、万歳事件とも呼ばれた。1948年の制憲憲法では「己未三一運動」と呼ばれた。

* 年表は第38回憲法を考える映画の会『隠された爪跡』
 (2017年10月) 手元資料より転載
 * 用語解説はWikipediaより転載

資料⑥ 関東大震災中国人虐殺と王希天殺害事件

関東大震災中国人虐殺と王希天殺害事件

関東大震災時、朝鮮人だけでなく、中国人も虐殺対象になったことはあまり知られていない。朝鮮人と間違われて殺害されたケースもあるが、なぜ、中国人が対象になったのか。

日清戦争後の好景気により労働不足が生じ、それを補ったのが中国人だった。1899年の勅令により、外国人労働者は行政官庁の許可を得なければ、指定外の場所に居住したり、仕事をしたりしてはいけないとされた。ところが1917年「支那人労働制限解除の件」が閣議決定され、戦時に限る、日本人労働者の得難い場合に限る、三千人以下とする、主務大臣の認可を得るなどの条件つきながら、中国人労働者の受け入れが緩和された。中国人は主に東京の大島町、南千住に居住し、石炭の陸揚げ運搬、鋼板かつぎ、土砂運びなどの力仕事に従事。日給は日本人より2割ほど安かったと言われる。

1921年のワシントン会議を受けて軍縮が断行されると、軍人の除隊、関連工場の大量解雇により、失業問題が発生。競争者である中国人労働者への風当たりが強くなり、中国人の雇用を厳禁する通告が出されたり、退去や雇用禁止などを求め、排斥運動が行われるようになった。日中の労働者同士による乱闘事件も発生。低賃金をいとわない中国人労働者は「仕事を奪う宿敵」と、日本人労働者の怨嗟的であった。

当時中国人労働者の待遇改善、退去命令の撤回を求めて活動したのが中国人留学生たちであり、王希天はそのリーダーの一人で、1922年9月21日設立された中華民国僑共済会の委員長となった。共済会は賃金不払いやピンハネを追求し、賃金の増額や待遇改善を要求し、仕事の中外活動までも始めたので中国人労働者の信頼を集める一方、日本側からは敵視されるようになった。これが、関東大震災後の中国人殺害、王希天殺害の背景である。

王希天殺害事件

王希天 満洲吉林省長春出身。1896年9月11日出生。1914年渡日。1916年中国キリスト教青年会に入会。キリスト教の洗礼を受ける。1917年、一高予科に入学。1917年に来日した周恩来とはエリート校南開中学校出身で同士で交流があった。1918年日中間で結ばれた陸海軍共同防敵軍事協定の危険に気づき、留日学生救国団を結成。その後中国へいったん帰国して学生集会、大請願デモなどに積極的に関わった。このような一連の行動で、日本の警視庁にマークされ、「尾行つき」となる。

殺害

関東大震災発生後、王は友人たちと対日審査委救済会を組織し、まず留学生の救済に当たる。9月9日、気懸かりだった労働者の様子を見に牛込を出発して大島町に向かう。昼過ぎ大島町の惨殺現場に向かい

死体を中国人かどうか調べて歩いたと言われる。午後野重七連隊に逮捕され、亀戸郵便局となりの憲兵司令部に連行される。以下、目撃者の証言を総合すると次のようになる。翌日亀戸警察署に移され、昼は中国人受領事務を手伝った。収容された中国人は習志野に送られるが、王は労働者のことで用事があるから同行は出来ないと断ったとのことである。12日早朝3時、制服帯剣の兵士2名が王を縛って連れ出し、外で第六中隊佐々木大尉がこれを受け取り、千葉会堂を東へ連行され、逆井橋のもとで待ち受けていた野戦重砲兵第1連隊・垣内八洲夫中尉が王を斬殺、死体は遺棄された。

王の殺害を知った陸軍中枢は、犯人の処罰を忌避し事件を隠蔽する。しかし10月、王が消息不明となった直後から足取りを探っていた王の友人、王兆澄が中国に帰国し、王の殺害疑惑が大々的に報道され外交問題化する。一方日本側は事の重大さから五大臣会議により王希天事件並びに最も虐殺者の多かった大島町事件の徹底的隠蔽を決定する。

調査団派遣から現在まで

12月、王正廷を団長に中国人虐殺に関する調査団が来日する。これらの虐殺事件について、日本政府や軍は隠蔽工作を実施、王希天については事件を起こした部隊が所属する旅団の参謀格であった遠藤三郎大尉が隠蔽工作を担当した。王はいったん習志野に設けられた検束者の収容所に送られるはずであったが、教育もあり危険のない人物であったようだったので釈放、そのまま行方不明になったとの筋書きが作られた。調査団に対し日本政府（外務省）は王希天事件についての真相を隠蔽し、責任を認めることはなかった。

1970年代、日本学術界では震災時の中国人虐殺事件への関心が高まり、王希天事件の加害者証言が公表されるなど、事件の解明が大きく進展してきた。戦後、事件隠蔽に関わった遠藤三郎の証言や、戒厳令下で活動した野戦重砲兵第一連隊所属の久保野茂次の証言と密かにつけていた軍隊日記により事件が明らかになった。日記によれば、王は切り殺された後、顔・手足などは切り刻まれ、服は焼き捨てられ、持っていた金銭と万年筆は奪われたという。王の乗っていた自転車は、部隊で戦利品と称して乗り回されていたという話も伝わっている。一方、1990年代、中国側も資料発掘や学術研究など、虐殺事件の究明に本格的に着手。中日研究者による絶え間ない努力により、震災時中国人虐殺事件の真相の解明は進んだ。

王や中国人労働者虐殺の真相を調べていた仁木ふみ子は、王の死後約70年後の1990年に王の息子を探し出し、ようやく真相が親族に伝えられた。（S.N.記）

出典：「関東大震災100年の今を問う」山田朗監修 経済評論社
「震災下の中国人惨殺」仁木ふみ子著 青木書店

資料⑦ 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人（西崎雅夫 編）より

関東大震災の直後 朝鮮人と日本人（西崎雅夫編）ちくま文庫

「子どもの作文」「文化人の証言 当時の記録」「文化人らの証言 当時の記録」「文化人らの証言 その後の回想」「朝鮮人の証言」「市井の人々の証言」「公的資料に残された記録」に章分けされている。

「子どもの作文」では、～鮮人騒ぎで、三人まで日本刀やピストルで惨殺されるのを目の前で見せられ血刀をひっさげた男が「お前たちもみな殺すのだぞ」と言われその晩眠れなかったこと～ 五、六人の人が木にゆわかれ、顔などはめちゃめちゃで目も口もなく、ただ胸のあたりが、びくびく動いているだけだった～ といった生々しい文。子ども達は大人の言ったことを信じ、朝鮮人をにくらしいと思う者、朝鮮人が悪いことをしたと信じられない者、当時の心情がそのまま綴られている。

「文化人らの証言」では、9月2日志賀直哉が見舞いで9月2日に東京に向かう。信越線廻り、汽車は何度も止まり、途中で兵隊や野次馬が朝鮮人を追いかけていくところ、連れていくところを見る。そして殺伐とした東京へ、若者が得意気に「・・・鮮人が裏へ廻ったんで、直ぐ日本刀を持って追いかけると、それが鮮人でねえんだ」「然しこう云う時でもなけりや、人間は斬れねえと思ったから、到頭やっちゃったよ」と聞いた、といったことが収録。他に芥川龍之介、黒澤明など多くの文化人の記録が掲載されている。

「朝鮮人の証言」では、鄭(チョン)然(ヨン)圭(ギョ)（作家）が震災の3か月後、同胞の遺骨を訪ねて新聞記者と亀有警察に。私服巡查が案内、「そこ、あなたの立って居るところも、それその骨が見えるでしょう」といった。・・・よく見ると腐敗しきった水の溜まってある中から、白いような黒いようなものがちよっと先きを出していた。わたしたちはまたあたりを見がした。先刻わたしの立っていた所は踏むとちやぶちやぶ音がして、どうしても骨は見つからない、私服の男は平気に「其処は多分死体をいけてあったと思います。」「なに？焼きもしない、斬り殺されたそのままを・・・」といったやりとりが書かれている。催承(チェスン)萬(マン)（在日本東京朝鮮基督教青年会）

は亀井戸所で働いていた人の目撃談を紹介「私は86名朝鮮人を銃と刀で射殺したり、斬殺したりするのをまのあたりにみた。・・・指揮者は、銃声が聞こえると付近の人に恐怖感を与えるから、銃の代わりに刀で殺せと命令した。そこで軍人たちはいっせいに刀を抜いて83名を一時に殺したが、そのなかには妊娠中の婦人もいて、腹を斬ったところ胎児が出てきたが、その泣き声に、胎児まで刺し殺してしまった。殺された屍体は翌朝二時にトラックで運ばれていった……」なお殺害された者の原籍と姓名は数名を除いてわかっていないとのことである。

「市井の人々の証言」では、本庄で子どもが並べられて、親の見ている前で首をはねられ、その後親をはりつけに・・・など残酷な場面がたくさん証言されているが、聞き書きで「四つ木橋の下手の墨田区側の河原では、10人ぐらいつつ朝鮮人をしばって並べ、軍隊が機関銃でうち殺したんです。まだ死んでいない人間を、トロツコの線路の上に並べて石油をかけて焼いたんです。」や同じく旧四つ木橋で朝鮮人10名以上、そのうち女の人が一兵隊さんの機関銃で殺されて驚いたという証言が掲載されている。

全体的に自警団がやったという認識でいたが軍隊が？
「公的資料に残された記録」では、警視庁外時事課長広瀬久忠の外務省宛報告
「大島町支鮮人殺害事件」で支那人及び朝鮮人300名～400名軍隊及び自警団に於いて銃殺、または、撲殺・・・が報告されている。

当時船橋警察署の巡查部長の話として、検事が虐殺した犯人を呼び出し「君は執行猶予にする」と言っていて、取り調べた・・・とのことが「市井の人々の証言」の一つとして記載されていた。
震災に乗じて、あるいは流言などに踊らされ、朝鮮人や中国人を殺害、大変なことをしておきながら罪を問われずに生きてきた人のいかに多いことか、そして、それをよしとしての日本の歩みが、戦争時の虐殺、そして脈々と続く民族差別につながっている などと改めて考えさせられる一冊であった。（H.K.記）

流言蜚語が、どこからか伝わってくる、一も二もなく、それを信じて、また振りまき、「多摩川から朝鮮人暴徒が大挙襲撃してくる」とか、「朝鮮人が井戸に毒を投げこんで歩いている」とか、「社会主義者が蜂起した」とかきくたびに、事の実態を考慮する余裕のある者はなく、青竹をそいで、先を火であぶった竹槍をもったり、腰に日本刀をさしたりして、交代で町を警戒した。そして、往來の者を誰何し、髪の毛のながい若者は社会主義者、言葉づかいのはっきりしないものは鮮人ときめつけ、どいつやさのさ節をうたわせたためしたりした。

日ごろ、あいそいい小心者の理髪店の主人が、目を血走らせ、性格一変して言葉づかいも暴慢に指図しまわたり、女髪結いの亭主が、急に狂人じみてきて「ぶんなぐれ、殺せ」などと、嬌激なことを口走ったりするのだった。

流言を取り締まるピラを出しながら、巡査までが常軌を失って、「朝鮮人は目黒あたりまで来てあはれている。しつかりやれ」などと激励していった。砂村で三人、竹槍で刺してきたと、英雄気どりでふれて通る、土建屋ふうの男もいた。

そんなあいだを、おどおどして逃げ回るようにしている一人の青白いインテリ青年を、ともかく安全なところへ連れてゆくことを引き受けて、僕らが、二人で歩いていたときである。橋のたもとからいきなり五十かっこの和服の男が棍棒をもって現われ、「社会主義者だな。きさまのような奴がいるから、いかんだ」と叫んでなぐりかかってきた。明

不動のものとして、腰をおろしていた大地が、その根底をゆるがしたというこの実感は、同時に、不動のものとして考えていた財産、生命、ひいては国家の権威についても、乗りかかって安閑としていられないという、不安感にも通じるものであった。もちろん、それについて、まったく信用を失墜させたというのではない。災害がおさまるとともに、回復にむかったが、あの瞬間の絶望感はいくく人びとの心にのこり、日本人のもつ心の割れめともいうべき、仏教的な無常感や、もつと現実的な人間の不信感にまでもつながって、ようやく染みついてきた個人思想の根を掘ることになった。大正のヒューマニズムのほかに、大正のニヒリズムが一つの特徴化され、それがしだいに、大衆のあいだにも浸潤してゆくことになった。

この災害によって、何かが大きくこわれた。その何かをはっきりさせることが、重大なことなのだ。

わずか、無秩序混乱の幾十時間のあいだに、大正人のきれいなうつらひんめくられ、昔ながらの日本人が、先方から待っていたとばかりに、のさばり出てきたのだ。それは、僕ら自身のなかから、拘束し、干渉するものがないとわかって、無遠慮に、傲慢に、鎖をはずされたならず者のように、口笛をふきながら、あたりをしり目に掛けて出てきた、ほんとうの日本人なのだ。

折々のことば

鷲田清一 3685

傲慢に、鎖をはずされたならず者のように、口笛をふきながら、あたりをしり目に掛けて出てきた、ほんとうの日本人

金子光晴

関東大震災時、甚で発生した流言蜚語と朝鮮人虐殺。社会の基音たる一つの節度が崩れた時に隙間から噴きだすのは、それまで抑え込まれていた社会的不満や怨恨だと、詩人は言う。そこにのさばり出てきたのが、誰かを排除することでしか己の同一性を確認できない小心者と、それに無言で同意する人々だったと、『絶望の精神史』から。

2026・7・23

治の日本人の熱病が再発したのだ。だがどんなことをするかわからないし、どんなことでもできたかもしれない。

マレイ人が匕首をひらめかし、往來に飛び出して、相手かまわず殺傷してあるく発作的な狂乱状態を、アモックという。日本の軍は、小心な日本人を勇敢な日本人にするために、この「アモック」を利用した。「アモック」を醸成するには、絶対的な権力と抑圧がある。流言の出所は、軍だという風説も飛んだが、そんなことぐらいはやりかねない卑劣な性格のものに、軍そのものも墮落しつつあった。

そんなどきどきのあいだに、甘粕大尉が、無政府主義者の大杉栄夫妻とその甥の三人を虐殺する事件があった。冷静にかえったインテリ階級ばかりでなく、一般庶民も、この事件に対する批判がきびしく、軍が圧力をかけてうやむやにすませるようなわけにはゆかなかった。しかたがなく軍は、大尉を満州に送って、お茶をにごした。

屍のとりかたづけ、焼材や瓦礫の始末もたいへんだった。残暑のきびしさがながくつづいた年で、やっとう秋風が立つと、びしょびしょ雨がふり出した。アメリカ松材が大量に輸入され、焼跡のあちこちに、赤い松材のパラックが建ちはじめた。下町にのこっていた江戸は、この地震であとかなくなった。

* 今年の7月23日の朝日新聞 鷲田清一さんの「折々のことば」に上記のような関東大震災の虐殺についての金子光晴の言葉を見つけました。どのような言葉が書いてあるのか知りたくてその前後の言葉を抜き書きしました。

この本の「まえがき」にも「…明治からの国是が正しいという人にとって、『大東亜戦争』の敗北は十分な教訓となっていない。つまり、条件がそろい、実力がつけば、同じ無謀を繰り返しかねない人間の、性悪な情熱を代表している。」とあります。

「大虐殺を起こしたのが市民と知った時の『なぜ』に答えるものがここに

あるかもしれません。1968年の明治百年の時に書かれた嘆かわしい「日本人の精神論」です。(S.H.)

資料⑨ 韓国からみた関東大震災虐殺

東アジアの観点から見た関東大震災

1923年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9の巨大地震が日本の関東地方南部を襲いました。関東大震災です。10万人以上が亡くなったり行方不明になり、東京中心部の建物の約43%が焼失しました。陸軍の被服工場跡地に避難した約3万8000人が火災旋風によって犠牲となる悲痛な出来事もありました。関東大震災にはもう一つの痛ましい歴史があります。朝鮮人数千人（当時の朝鮮人の調査では約6000人）と約600人と推定される中国人、および日本人が虐殺された事件です。

虐殺の原因は流言と政府の対応にありました。地震直後から「朝鮮人が暴動を起こす」、「井戸に毒を入れた」などの流言飛語が飛び交うと、日本政府は戒厳令を出して、朝鮮人への警戒を各地域に指示しました。戒厳令のもとで軍隊や警察、一般住民（自警団など）が朝鮮人・中国人・日本人を殺害しました。日本人のアナキストである大杉栄と伊藤野枝が大杉の甥とともに虐殺され、また、日本人の労働運動家10人、中国人社会事業家王希天も虐殺されました。日清戦争に始まるアジアへの侵略戦争や植民地支配によって、日本人の心のなかには朝鮮人・中国人に対する差別と憎悪、独立運動や労働運動に対する警戒心などが内在していました。こうした憎悪と警戒心に火がついて、暴力へと発展したのです。発音しにくい日本語（15円50銭）をうまく発音できず、朝鮮人だと誤解された地方出身の日本人や障がい者が、自警団に殺害されることもありました。

このような痛ましい歴史から、どのような教訓を得ることができるでしょうか。それは、依然として他の民族や宗教への嫌悪の声が存在する今日の東アジアにとって、差別と嫌悪を越えて理解と共感へと進む一つの道しるべになるのではないのでしょうか。



関東大震災（東京・日本橋人形町付近）



*今回の上映作品『1023 関東大震災』は韓国のスタッフによってつくられたドキュメンタリーです。この作品のことを知る以前から、韓国朝鮮から見た「日本の朝鮮半島あるいはアジアへの侵略はどのようなものか」を知りたいと思っていました。

とくに、韓国や中国の教育の現場で、歴史の教科書で日本の侵略や戦争はどのように描かれているのを知りたいと思っていました。

今回の関東大震災朝鮮中国人虐殺のことについても、どのように教えられているか調べてみたいと思っていました。教科書や歴史教育の現場でどのように教えられているかを調べることはまだ、できていませんが、日本・中国・韓国の教育関係者が共同編集した『**新未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史**』という本の中に『**東アジアの観点から見た関東大震災**』という記事があることを教えてくれた方がいました。そのページを転載したいと思います。

他にも、このような記事があるとか、韓国中国の現代史教育あるいは歴史教育などについて、知っている方がいらっしゃったら教えて下さい。一緒に調べて情報共有していきましょう。

私たちは、戦争をしない、させないためにまず近隣の国、人々との理解を取り戻し、友好の上に立った関係をつくっていくことが第一歩と考えます。S.H.

【韓国】関東大震災後の朝鮮人犠牲事件の真相究明を求める特別法の制定
なお韓国でこのような特別法が制定され、今年12月31日施行になります。全文は下記URIより参照下さい。（藤原夏人／2026年4月）国立国会図書館デジタルアーカイブ
<https://dl.ndl.go.jp/view/prepareDownload?itemId=info:ndljp/pid/14737619>

虐殺否定論の狙い

「ここまで、朝鮮人虐殺否定論が、荒唐無稽な主張であるにもかかわらず一定の影響を持ち、実際に状況を動かしてきたのを見てきた。私たちはこうした現実をどう考えるべきだろうか。」

私は、虐殺否定論の「意図」と「機能」に注目するべきだと考える。第2章で見たように、そもそも虐殺否定論とは、工藤夫妻が全て承知の上で発明した「トリック」であった。そして、それをばら撒く人々も、心からそれを信じているのか、信じたふりをしていないのか知らないが、いずれにしろひとつの意図をもって積極的に状況に働きかけている。

では彼らの意図とは何か。それは先ほど紹介した3つの事件を見れば自明である。横浜市の副読本問題では教育現場から虐殺の事実を排除しようとした。内閣府HP「削除」問題では研究成果への一般の人々のアクセスを遮断しようとした。そして、小池都知事の追悼文取りやめには虐殺犠牲者追悼の場を社会的に孤立させ、最終的にはつぶしてしまおうという狙いが見て取れる。

教育の現場から事実を排除し、まっとうな研究成果を市民から遠ざけ、追悼の場を消し去る。その先に彼らが目指しているのは、虐殺の記憶の「隠蔽」であり、「忘却」だろう。虐殺否定論は、あくまでそのための手段なのだ。虐殺否定というトリックを発明した2人も、それに合わせて踊ってみせる人々も、虐殺否定論を本気で「正史」にできるとは思っていない。

虐殺否定論の意図を考える上で参考になるのが、ホロコースト否定論を批判的に研究する米国の歴史学者デボラ・E・リップシュタットの言説である。

リップシュタットは、17年12月に日本でも公開された『否定と肯定』という英国映画のモデルとなった人物だ。その著書『ホロコーストの真実』（滝川義人訳、恒友出版・1995年）の中で、彼女はこう指摘している。

否定者は、論点が真つ二つに割れていて、自分たちがその「一方の立場」にあると認知されたいのである。

つまり、ホロコーストが実際にあったか否かについて2つの対立する学説がある、という構図にさえ持っていれば、否定論者の「勝ち」だということだ。そうならば一般の人々は、歴史の素人である自分にはどちらが正しいか分からないので判断保留にしようとか、真実はたぶんその中間にあるんだろうとか考えるようになる。これが否定論の「機能」である。

これは朝鮮人虐殺否定論にも大いに当てはまる。虐殺があったという説となかったという説の2つがある、という構図が受容されてしまえば、日本の社会風土では、学説が分かれているテーマを教育に持ち込んだり、公的な場で追悼したりするべきではない、という話に帰結する。実際、先に触れた右翼団体「そよ風」は、18年1月21日のブログのタイトルにこう掲げている。

「諸説あつてはいけなのですか？」（↓16頁）

私たちは虐殺否定論のこうした狙いとどう対決すべきなのか。これについてもリップシュタットはヒントを与えてくれている。彼女は、否定論者と「論争」してはいけなく強調する。それは、「諸説ある」という構図をつくってしまうからだ。では放っておくしかないのか。そうではない。

ホロコースト否定者の基本戦略は、歪曲である。全体の大ウソに少しの真実をまぜて、否定者の戦術を知らぬ人々を混乱させようとする。肝心な情報を勝手にカットしたつぎはぎ話、ミスリードするたぬ事実の一部にしか触れないハーフtruth。いずれも、事情に疎い人々をだまそうとする彼らの常套手段である。

ではどうするか。リップシュタットは否定論者の「物事を混同せしめ歪曲するやり方」を「もっともらしい議論の吹きかけ方」「意図や手口」をこそ、「白日のもと」にさらすべきだと主張する。

これを私の言葉で言い換えると、否定論者の言説を一つの「説」であるかのように扱い、議論するのはなく、これは一体どのような「トリック」だろうかとか客観的に吟味し、説明し、そのカラクリを人々の前で明らかにすることである。要は学説や意見ではなく、「手品」として扱えるということだ。帽子から鳩が飛び出すさまを見て超能力かとも考えるのではなく、「どのような手品なのか」と考えるということであり、社会的には、否定論のトリックとしてのタネを広く共有し、これを「諸説」であるかのように扱うことを決して認めないことだ。恐らく朝鮮人虐殺否定論以外の歴史修正主義についても、同じことが言えるのではないかと思う。

災害時のデマは生命を奪う

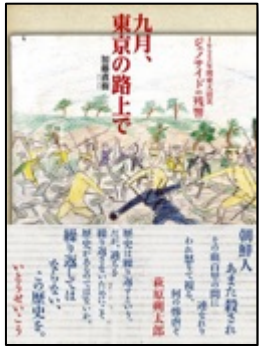
そもそも私たちはなぜ、朝鮮人虐殺否定論を許してはならないのか。



*4ページ「この映画を見て考えたいこと」の4つめの「なぜ」「なぜ『虐殺はなかった』という説がまことしやかに今も絶えないのでしょうか?」の答えとして、加藤直樹さんの著書『トリック「朝鮮人虐殺」をなかったことにしたい人たち』の中から『虐殺否定論の狙い』の章を転用させていただきました。今回の資料の中で最も私たちが知りたかったことです。その後の「災害時のデマは生命を奪う」を含め、今そこにある危険として是非読んでいただきたい本です。S.H.

資料⑪ 関東大震災大虐殺についての書籍（1）

*



九月、東京の路上で 1923年関東大震災ジェノサイドの残響
加藤直樹（著）
ころから／2014年3月刊

・天災のち人災——未曾有の大震災におののいた「ふつうの日本人」と行政は、デマに煽られ朝鮮人虐殺へと走った。100年前のヘイトスピーチは残響となって、いまもこの街を覆っている。朝日新聞、週刊文春など100以上のメディアで紹介されたベストセラー！



関東大震災一〇〇年の今を問う：虐殺否定・歴史改ざんを許さず
山田朗（監修）
日本経済評論社／

関東大震災から私たちはなにを学ぶことができるだろうか。1923年9月に起きた朝鮮人・中国人虐殺をめぐる新たな知見、記憶の継承、国家責任の追及、歴史教育の実践記録など多彩な論考を収録。



証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人
西崎雅夫（著）
筑摩書房（ちくま文庫）／2018年8月1923（大正12）年の関東大震災。その直後から日本人による朝鮮人への虐殺行為が始まる。被害は中国人や、朝鮮人と疑われた日本人にも及んだ。内閣府の中央防災会議が出した「災害教訓の継承に関する専門調査会」報告書によれば被害者は数千人ともいう。芥川龍之介、折口信夫、和辻哲郎、志賀直哉、千田是也、黒澤明…、文化人、市井の人々、子供の作文、公的史料が伝える約180編を収録。



関東大震災 朝鮮人虐殺を読む——流言蜚語「フェイク」が現実を覆うとき
劉永昇（著）
亜紀書房／2023年8月刊
〈マジョリティの「恐怖」が「危険なマイノリティ」の幻影を生む〉
「朝鮮人が暴動を起こした」「井戸に毒を入れた」……。——なぜ、根拠のない風説が伝染し、現実の虐殺を生んでしまったのか？
豊富な資料により、日本近現代史の間に潜む差別と排除のメカニズムを暴き出す、迫真の評論集！



TRICK トリック「朝鮮人虐殺」をなかったことにしたい人たちが
加藤直樹（著）
ころから株式会社／2019年7月刊
工藤美代子、産経新聞、日本会議、自民党文教族、小池都知事、百田尚樹……彼らが掲げた「虐殺否定」は幼稚な“フェイク”だった！『九月、東京の路上で』の著者が、ネット上に蔓延する「虐殺否定」がまっとうな「論」ではなく、タネも仕掛けもある「トリック」であることを白日の下に晒す。



関東大震災朝鮮人虐殺の記録
西崎雅夫（著）
現代書館／2023年11月

震災から100年目の2023年、俳優・伴淳三郎ほか新たに32ページ分の証言を大幅増補！
荒川河川敷でおこなわれた追悼式・朗読証言も所収。



関東大震災 文豪たちの証言
石井正己（著）
中央公論新社／2023年8月刊

関東大震災から100年。震災直後から、雑誌メディアを中心に、多くの作家が手記、証言を残した。ジャーナリズムの最前線に立った文豪たちの記録は、私たちに何を語りかけるのか。鏡花、荷風、志賀、谷崎、芥川、与謝野晶子、野上弥生子、平塚らいてう、吉野作造ら、作家・文化人・著名人による文章から、関東大震災のさまざまな局面が映し出される。すぐれた筆致と眼差しが描く震災のリアル。

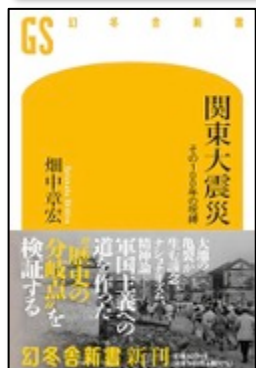


地震と虐殺 1923-2024
安田浩一（著）
中央公論新社／2024年6月刊
関東大震災の発生直後、各地で飛び交ったデマによって多くの朝鮮人が命を奪われた。非常時に一気に噴き上がる差別と偏見。東京で、神奈川で、千葉で、埼玉で、悲惨な事件はいかなるメカニズムで起きたか。虐殺の「埋もれた歴史」は誰によってどのように掘り起こされてきたか。100年余りが経過した現在、何が変わり、何が変わらないのか。歴史的事実を葬ろうとする者たち、人災を天災の中に閉じ込めようとする政治家、差別行為にお墨付きを与える行政……。



神奈川の関東大震災：100年後の視点
鈴木晶 小川輝光 藤田 賢久（著）
えにし書房／2023年8月刊

関東大震災100年の節目に、神奈川の高校教員を中心に約20人の執筆者が、地域を歩き、歴史を掘り起こし、考え、未来に向けた「記憶の場」として遺すべく編まれた1冊。フィールドワーク、授業実践の参考書に最適！



関東大震災 その100年の呪縛
畑中章宏（著）
幻冬舎（幻冬舎新書）／2023年7月刊

東京の都市化・近代化を進めたといわれる関東大震災は、実は人々に過去への郷愁や土地への愛着を呼び起こす契機となった。民俗学や民藝運動の誕生、民謡や盆踊りの復興は震災がきっかけだ。その保守的な情動は大衆ナショナリズムを生み、戦争へ続く軍国主義に結びつく。

資料⑪ 関東大震災大虐殺についての書籍（2）

S.H.



中国・朝鮮人の関東大震災: 共助・虐殺・独立運動

武藤秀太郎（著）
慶應義塾大学出版会／2023年8月刊

中国・朝鮮の人々にとって、関東大震災とはどのような経験であったのか。中華圏からの震災支援、虐殺事件、独立運動団体「義烈団」の動向、大韓民国臨時政府の対応などから精緻に検証する。近代未曾有の大災害を東アジア関係系に位置づける試み。



関東大震災と流言 水島爾保布 発禁版体験記を読む

岩波書店（岩波ブックレット）／2023年8月刊

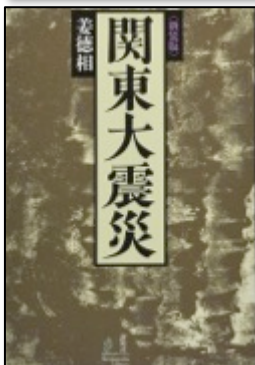
一九二三年九月一日午前十一時五八分、関東大震災が発生。おさまらない揺れと迫り来る火災、そして朝鮮人襲撃のデマ……。画家、文筆家であった水島爾保布は地震発生直後から、人々がしだいに分別を取り戻していくまでの様子を書き記すが体験記「愚漫大人見聞録」は発禁処分で世に出せなかった。幻の体験記は何を語るのか。



関東大震災 虐殺の謎を解く ——なぜ発生し忘却されたのか

渡辺延志（著）
筑摩書房／2025年7月刊

関東大震災で多くの朝鮮人が殺されたのはなぜか。荒唐無稽な流言に人びとが脅えたのはなぜか。百年を経た今も謎の歴史に迫るため、陸軍の記録、小学生の作文、海軍練習艦の無線傍受録、隠されていた閣議の決定、恩赦をめぐる行政文書など新たな手がかりを読み解き、実際に何が起きていたのか、多くの犯罪者が罪に問われなかったのはなぜか、虐殺はなぜ忘却されたのかを徹底追及。



関東大震災 姜徳相（著）

新幹社／2020年9月刊

戒厳令下、朝鮮人大虐殺は起きた。最も基本となる研究書、消された名著の復刻。

- 1 戒厳令の発布 2 流言の発生
- 3 流言の伝播工作 4 軍隊の出動
- 5 自警団の活動 6 朝鮮人総検束
- 7 犠牲者調査 8 自警団の検挙
- 9 社会主義者の問題



関東大震災 描かれた朝鮮人虐殺を読み解く

新井勝紘（著）
新日本出版社／2022年8月刊

関東大震災から99年。震災時、東京、関東周辺で軍隊・警察及び自警団によって6000人以上と言われる朝鮮人が殺された。その混乱の中で、この事実を絵筆で描いた画家たちの絵と新発見の幻の画家・淇谷による「関東大震災絵巻」を公開し、そこから私たちに問いかけられた課題を考える。



関東大震災

吉村昭（著）
文芸春秋（文春文庫）／2004年8月刊

大正12年9月1日、午前11時58分、大激震が関東地方を襲った。建物の倒壊、直後に発生した大火災は東京・横浜を包囲し、夥しい死者を出した。さらに、未曾有の天災は人心の混乱を呼び、様々な流言が飛び交って深刻な社会事件を誘発していく。二十万の命を奪った大災害を克明に描きだした菊池寛賞受賞作。



聞き書き・関東大震災

森まゆみ（著）
亜紀書房／2023年8月刊

100年前の9月1日、町は大きく揺れた。そこに暮らす人びとは、どのように生き延び、記憶したのか。人びとの声と文学者などの日記から振り返る関東大震災。1923年に起きた関東大震災から100年。著者が地域雑誌『谷根干』を始めたころ、町にはまだ震災を体験した人びとが多く残っていた。それらの声とその界隈に住んでいた寺田寅彦、野上弥生子、宮本百合子、芥川龍之介、宇野浩二、宮武外骨らの日記など、膨大な資料を紐解き、関東大震災を振り返る。



関東大震災と民衆犯罪 ——立件された一四件の記録から

佐藤冬樹（著）
筑摩書店（筑摩選書）／2023年8月刊

逮捕された自警団員600人以上。その実態に迫る。事件の記録・資料から加害者と被害者のプロフィールを分析、普通の人々を凶行に走らせたものとは……



コリアン・ジェノサイド 関東大虐殺の法的考察

前田朗（著）
三一書房／2026年4月刊

〈関東ジェノサイドの責任者は誰か〉日本はコリアン・ジェノサイドを終わらせることを拒否している。今なお虐殺や差別の事実を否定し、被害者を攻撃する社会が蔓延している。「日本人ファースト」が喧伝され、政府は「外国人対策」を唱えるなど、排外主義と差別が深刻化している。この現実を前に、私たちは何をすべきか？ 筆者は東京、埼玉、神奈川の虐殺現場をたどり、植民地における虐殺、日本列島における虐殺、強制連行・強制労働、日本軍性奴隷制など植民地支配犯罪を再考。本書は歴史家や市民による研究に学びながら、国際法（特に国際人道法、国際刑法）の視点から関東大虐殺を再考する試みである。

ジェノサイド、人道に対する罪の国際法を簡潔に解説し、刑事責任の根拠としての上官の責任の法理を基に、関東大虐殺の法的検討を一歩進める。現在も続く植民地主義を解剖し、日本社会の脱植民地主義の課題を提起する。

資料⑫ 関東大震災大虐殺に関連した映画

【ドキュメンタリー映画】

『関東大震災朝鮮人虐殺記録映画 隠された爪跡』

1983年・58分・呉充功監督作品
1923年9月1日マグニチュード7.9の大地震が、関東地方をおそった。死者10万人にもおよぶ関東大震災である。この時、6500名以上の朝鮮人が軍隊、警察、そして日本の民衆の手によって殺されていることはあまり知られていない。そのうえ、今なお遺骨が埋められている事実があった。
1982年9月、東京の荒川河川敷で地元の古老の証言をもとに、遺骨の発掘作業が始まった。映画学校に通う朝鮮と日本の若者たちがカメラを持って駆けつけた。真実が隠されてきた60年の歴史を、この映画は追う。当時、押上に住んでいた曹仁承(チョ・インスン)さんはじめ、多くの証言が真実を語る。

この映画は隠されてきた歴史の爪跡を明らかにする貴重な記録映画である。

★第38回憲法を考える映画の会
(2017年10月)で上映

『払い下げられた朝鮮人 関東大震災と習志野収容所』

1986年・53分・呉充功監督作品
関東大震災の時、事実無根の流言蜚語が朝鮮人に集中し、官民による朝鮮人虐殺は、約6,500人以上の犠牲者を生んだ。政府は「保護、収容」の名目で、各地で警察と軍隊を動員して、朝鮮人を強制的に集めた。陸軍習志野収容所には約3200人の朝鮮人が送り込まれていった。
しかし、軍は数名の朝鮮人を密かに連れ出しては殺害していた。そして、隣接の村々にも朝鮮人を払い下げ、その受け取りを命じる。受け取った村民たちは流言を信じて、虐殺に加担してしまった。
いまだ虐殺された人数と行方は一部不明のままである。
映画は元自警団関係者、警察官、運良く助かった留学生の証言などを克明に映像化し、現在でも残る流言蜚語の根の深さを問いつける。

★第38回憲法を考える映画の会
(2017年10月)で上映

『1923ジェノサイド朝鮮人虐殺 100年の歴史否定(仮題)』

2023年・70分・呉充功監督作品

2023年9月1日は関東大震災時の朝鮮人・中国人大虐殺から100年に当たります。虐殺の事実に向き合わない日本政府、自治体の姿勢を正し、差別、偏見、ヘイトスピーチを許さない日本社会を築くために、関東大震災時の朝鮮人虐殺を扱ったドキュメンタリーを上映します。

【劇映画】

『福田村事件』

2023年・137分・森達也監督作品
関東大震災直後の混乱の中で実際に起こった虐殺事件・福田村事件。1923年、澤田智一は日本統治下の京城(ソウル)を離れ、故郷の千葉県福田村に帰ってくる。澤田は日本軍が朝鮮で犯した虐殺事件の目撃者であった。9月1日、関東地方を大地震が襲う。多くの人びとが大混乱となり、流言蜚語が飛び交う9月6日、香川から関東へやってきた行商団15名は次の地に向かうために利根川の渡し場に向かう。渡し守との小さな口論に端を発した行き違いにより、興奮した村民の集団心理に火がつき、後に歴史に葬られる大虐殺が起こってしまう。

『金子文子と朴烈』

2017年・129分・イ・ジュンイク監督・作品
1923年の東京。朴烈と金子文子は、運命的とも言える出会いを果たし、唯一無二の同志、そして恋人として共に生きていくことを決める。しかし、関東大震災の被災による人びとの不安を鎮めるため、政府は朝鮮人や社会主義者らの身柄を無差別に拘束。朴烈、文子たちも獄中へ送り込まれてしまう。社会を変えるため、そして自分たちの誇りのために獄中で闘う事を決意した2人の思いは、日本、そして韓国まで多くの支持者を獲得し、日本の内閣を混乱に陥れた。そして2人は歴史的な裁判に身を投じていく。

【ラジオ番組】



『報道特別番組 「流言蜚語百年～関東大震災と現代のヘイト」』MBCラジオ/2023年12月17日放送

2023年9月1日、関東大震災100年を迎えた。この大震災では、天災による死者だけでなく、殺害された多くの人(朝鮮人、中国人、社会主義者)がいたことを忘れてはならない。地震後の混乱の中で、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などの流言蜚語が瞬く間に広がり、虐殺の引き金となった。しかし、犠牲者の名前も人数もほとんどわかっておらず、日本政府はきちんと調査を行ったことがない。そして、京都・ウトロの放火事件(2021年8月)など、在日コリアンに対するヘイトは今も続く。震災100年の日、関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑の前では、碑の撤去を求める団体が集会を企画し、それを阻止しようとする市民たちとの間で激しい口論となった。100年前から現代につながるデマとヘイトの系譜を考える。

<https://www.youtube.com/watch?v=ituruY-064U>

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（1）



第88回 憲法を考える映画の会
は、映画『豹変と沈黙 日記でたどる沖縄戦への道』を見て、とくに日中戦争に向かった兵士たちの
心中がどのようなものであったか、
戦争というものがどのようなもの
かをたどり、考えました。

監督の原義和さんからはビデオ
メッセージが寄せられました。



【原義和さんビデオメッセージ】

このたびは上映会にご来場いただきまして誠にありがとう
ございます。沖縄に住んでおりまして、東京に行くのがなか
なか難しく、これは5月の28日に録音しているのですが、
6月7日の上映会のある日はスリランカに行っているんで、
どうしてもそちらに行くことができませんでした。それで
メッセージをということでしたので、短い時間でお伝えい
たします。

この『豹変と沈黙』を作った経緯について、お伝えします。
私のことをご存知でない方も多いのではないかと思います
が、フリーランスであのテレビの福祉番組であるとか、沖縄
戦のドキュメンタリーの番組などを作ってきました。

沖縄戦については、何本もですね。例えば日本軍の慰安婦
の問題とか住民虐殺のことであったり、番組を作ってみたん
ですけれども、その取材の中で沖縄戦の背景に中国戦線があ
るのではないかと問題意識を持つようになったわけです。
例えば、この映画にもありました通り、沖縄戦の時の陸軍の
トップツー、牛島満と長勇がですね。1937年の中国南京攻
略戦の時は幹部としてですね。重大な責任を負う立場で参戦
しているわけです。あるいは沖縄戦の主力部隊で選んだ 62
師団部隊とも言われますけれども、例の対馬丸に乗ってです
ね、上海から沖縄に来了。沖縄の沖縄線を戦った主力部隊と
いうのは、中国大陸からの転戦組であったということから、
中国戦線と沖縄戦というのは地続きなんだということを考え
ざるを得ないという中で、中国戦線のことをしっかり取材し
てみたいということから、取材をしていました。それが一つ
の結果としてこの『豹変と沈黙』という映画になったわけ
です。

例えば、牛島満がですね、まあ沖縄戦の時にどうであつた
かということについては、非常に多くのことが語られていま
すし、よく共有されていると思うんですね。ところが、その
彼が中国で何をやっていたのかということについては、あま
り、少なくとも沖縄において、多くを語られるということが
ないのではないかとすることがありました。調べてみるとで
すね、非常に重大な戦争犯罪と言っている、虐殺であったり、
あるいは強姦といった戦時性暴力をですね、彼のあの隷下の
部隊が行っています。牛島満はですね、「チェスト」という、
この映画にも出てきました、そういう突撃命令を出していま
すけれども、これは鹿児島県の言葉なんですね。で、彼の隷下
の部隊というのは、鹿児島の45連隊、それから宮崎都府の
23連隊で「チェスト」といえば奮起すると、その多くの鹿
児島、宮崎の兵士にしてみれば、隷下の兵士にしてみれば発憤
すると言いますか、「よしっ！」という突撃しようという気
持ちになった。それをあの意識して、そういう言葉を用いた
のだというふうに思われます。で、この「チェスト行け」と
いうのはですね、牛島満は翌年自らですね。あの実質で大き
な掛け軸で絵を描いています。決して達筆ではないんですけ
れども、そのなんていうか、そのあの文字からですね。彼の
思いがにじんできるとような気がしました。

これはあのご遺族はですね、鹿児島の護国神社に寄贈して、
今もその倉庫に眠っているという状態です。私はこれを見に
行きましたけれども、どうしたわけか、撮影は断られまして、
映画に組み込むことはできませんでした。しかし、その文字
から私が感じたことはですね、牛島満というのは、この自分
の「チェスト行け」という命令について、誇っていたと。武
勲のように考えて、掛け軸に書き、そしてそれをどこかわか
りませんけれども、掛けていたこともあっただろうと想像し
ます。それをですね、戦後も遺族が大事に持ち続け、今も残
されていたわけです。「チェスト行け」というような言葉
を使ったその彼の犯罪的なその状況というものが、中国戦線
からそのまま武勲として持ち込まれ、沖縄に持ち込まれたん
だろうというふうには私は思いました。彼の隷下でですね、45連
隊がどのようなことを南京でやっていたのかということを一
つご紹介します。芸水氷さんという方がいらっしゃいます。
もうお亡くなりになりましたけれども、南京虐殺記念館の方
で語り部としてですね。登録されて要するに、その南京の虐
殺事件ですね、「幸存者」言います。あの幸いに、生き持っ
た方ですけれども、芸水氷さんこの方はですね。一家7人、家
族7人を、日本兵によって惨殺されます。あの長江沿いのです
ね。ジョウシンガというところで、その時、彼女はいたわけ
で、家族と一緒にいたわけですがけれども、ここはどう反応を
調べてもというか、間違いなくですね。45連帯、鹿児島45
連帯の進軍地域なんです。ですから、もう間違いなく牛島満
の隷下部隊がやった犯行です。父親も母親も射殺されて、そ
して祖父もそして叔父。叔母、叔母はですね、強姦された上
に殺害された。という非常にとてもつらいですね。虐殺が行
われました。氷水さんは当時11歳で彼女自身もですね、撃た
れたんですね。首に傷を負いまして、彼女のことはですね、
このようにこれ銅像ですけれども、南京大虐殺記念館の庭に
ですね。彼女の顔を覚えて、あの銅像が建てられています。
これがちょっとシルエットになって見にくいんですけども、
左肩をあの自分で指してるんですね。彼女は自分がその受け
たその時の傷をですね、生涯亡くなるまで持ち続けているし
かななかったわけですけれども、その傷を実際に見せてですね、
証言をするということをやっておられました。その傷を見
せるポーズをですね。象徴的に銅像にしたということだと思
うんですけれども。私がこの銅像を見て思ったことはやはり
その 45連隊と23連隊をまとめていた36旅団長であった牛島
満の責任ということです。それをですね、やっぱりあの学ば
なければいけないのではないかと。そして検証し、そういう戦
争犯罪がですね。沖縄戦に引き継がれていったのではないかと
いうことをこれからも考えていきたいというふうに思ってい
ます。

非常に短い時間ですけれども、あのご清聴ありがとうございました。
本日はあのご来場いただきまして、そしてこの映画
をご覧いただきまして、誠にありがとうございました。

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（2）

【トークシェアで出た意見】

女性（S.S）大田区

私はA級戦犯の広田弘毅の縁者でもあります。その私は、夫が戦争のことを大騒ぎして93年に亡くなりましたので、翌年から全国を歩いて（非戦行脚を）続けてきました。訪ねた自治体が700以上になります。その中で大変印象深いところは、関東近県のある市長さんにお目にかかった時です。その時市長さんがおっしゃいました。私は（戦争で）800人以上殺した。500人までは教えてたけど、それ以降は数えてない。で、そのことを、私に明日会うという前日にご子息と初孫さんに、後で私の部屋に来なさいって言ったら、二人がいっしょって相続の話とかした。二人は僕たちに残すことはいいんですけど、その市長さんは自分は800人以上殺したと言おうと思ったが言えなかった。

そこに秘書の人がいたんですよ。秘書の人に君は800人以上殺した男が君の上司だ、君は人をひとりも殺してないだろう。ふるえることはないんだよと言った時は、大事なことは言おうと思ったけども言えなかった。私は誰が自治体を歩きましたけど、私をわざわざ呼びつけて「A級戦犯の縁者なんか会いたくない、会いたくなかった。でもどの面下げて会いに来るのか、その方を見たかったから呼んだんだ。無駄だ、無駄だ、無駄な旅だと言われました。私は下町育ちですから、そんな風に言われたら余計やる気が出て全国をそのようにして歩きまして。でも今は85になりましたのね。歳ですから関東近辺をうろちよろするだけです。すると私はどんなことあっても9条は守りたいから、あちらに署名簿がありますので心ある方は署名していただけますか。私は戦争法の時4195署名を集めました。でも今たった400は行ってないですよ。悔しいんです。それは膝痛もありますしね。なんたって85歳を四捨五入すると90ですからね。ですから皆様のご協力が仰ぎたいです。ありがとうございました。

男性（T.）志木市

埼玉県志木市から参りました。以前の火野葦平の「陸軍」の上映会で参加させていただきましたけれども、今日も大変貴重な映像を観させていただきました。本当にありがとうございました。特に牛島満、長勇。その2人の日中戦争に関わった****がですね、沖縄戦に関わっていたというのは、ほんとに勉強になり、今日初めて知りました。ただその標題の「日記でたどる沖縄戦への道」、沖縄戦への道というところがちょっと短かったかな、という個人的な感想です。確かにあの2人が関わったということは、今日、分かったんですけれども、沖縄戦がどのように戦われたかということ、その日中戦争との関わりが…、これからまた続編で作られると思いますけれども、そここのところをもっともっと知りたいなと思いました。

私もあの南京は2回訪問しております。で、その映像に出てきたところはだいたい回っております。しかし、勉強不足のこともあってですね、まだまだわからないことも結構ありますけれども、今日のこの資料をもとにですね、もう1回考えたいなと思っております。私は熊本県出身ですけれども、第6師団、それから鹿児島、宮崎、この師団ですね、日中戦争に大きく関わっていたということはもう私の少年時代から抜けられない記憶なんです。で、少年時代に、昭和30年代なんですけれども、よく大人たちは戦争体験を話してくれましたけれども、あんまりむごいことは話してないんですよ。そのことも踏まえながら、またもっと調べてみたいなというふうに思っております。今日は本当にありがとうございました。

女性（M.N.）世田谷区

3回目の参加です。素晴らしい映画で、知らなかったんですけども、「黒川の女たち」とかよりも、私はもっとみんなが見てほしいと思いました。なんでそう思ったかっていうと、あの日記っていうものが残ってたっていうのも珍しいのかもしれないんですけど、その日記を読み解いていくことをあの遺族の方、ご子孫の方が、日記に書いてないことは何なのだろうとか、その日記というものが、資料があって、さらにそれをただ鵜呑みにするだけじゃなくて、**子孫がいろいろ考えていくのがすごいヒントになって**。というのは、私も実はあの自分のご先祖の日記とかが残っていて、あと資料が残ってるんですね。で、関係ないのに、あの血縁じゃないのに、やっぱり何人も攻略したなんとか部隊というところの写真集というのも、ちょっと実家というか本家から出てきて、でなんでこんなものがあるんですかみたいな。今だから本当に過去の歴史を探っていくのに自分がわからなかったことを、迷いながらも資料を見ながらも、なんか手探りでやるのがすごく良かったと思います。ありがとうございます。

男性（E.M.）多摩地区

監督さんがいらっしゃったらぜひ直接話をしたかったなと思ってんですが、実は私の父は特殊な仕事で従軍画家軍隊といって、特に昭和15年に北支というところへ3ヶ月から4ヶ月ぐらい行ってるんですけども、陣中日記のようなものは全く残っていません。なんせ絵描きです。で、絵しか残ってない。ところどころとしか残ってません。私が中学か高校の頃にそういう話はそれとなく聞いてはいました。だから頭の中の記憶でしか残ってないんですけども、先ほどの映画の中で「便衣隊」という言葉も出てきましたけれども、私の父もその戦後仕事をやってまして、便衣隊という名前はよく聞きました。多分、父はあの軍隊経験ありませんので、何もそういう経験はないとは思うんですけども、その現場が「便衣隊」を処刑するところを見た。そうするとあまりの映画の中では表現されてい wasn't したけれども、父親はなんか首が飛び上がると、そういう話を私が子供の頃聞かされました。戦争ってそんな恐ろしいものだってことに気がつきました。で、あの今、もう、もう20年以上経って、少しずつ父親の残した絵をみるごとに、父親が中国でどういうところへ行っていたのか、どういう人間関係だったのかを調べてるんですけども、国会図書館とか外交資料館とか防衛省とかいろんなところへ行きました。どこにも残ってません。で、それもそのはず、8月15日以降、かなりのところ、焼き捨ててるんですね。残ってるのはGHQに戦争追求をされるかもしれないということで、国会図書館で焼いたというふうに言ってます。

で、戦争責任で言えば、あんまりここ政治的な話をする場所ではないんですけども、いまだに画家については、戦争責任問われています。去年、竹橋の近代美術館が戦後80年の戦争特集をやりました。ところがプレスリリースも図録もチラシもポスターも一切作れませんでした。（そのことについて）聞きましたが、やはりいろんなところから攻撃を受けるので、できないと。学芸員はいろんな研究をして、それを発表したい、日本の近現代史の中であのそれを解き明かしたいと考えているけれども、どうも**社会がそれを許さない。そういうところがここ数年、私の身の回りで起きています**。で、今のいろんなスパイ防止法とか、いろんな本を読みましたが、で、ここで分かったこと、ちょうど父親が生きていた当時、京都府が作った標語があります。それだけ言って終わりにします。間諜は映画に出てきたスパイのことです。「間諜は汽車に、電車に、井戸端に。」もう一度繰り返します。「**間諜は汽車に、電車に、井戸端に。**」あの、どこにでもいる。以上です。

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（3）

女性（M.）狭山市

はじめまして。たまたま。この昨日読み終わった本なんですけど、「**朝鮮人軍夫の沖縄日記**」っていう、昨日読み終えたばかりだったんです。お友達が昨日この映画の上映会があるということを知らせてくださったお友達に、これを渡したいなと思って、見てもらいたいと思って、今日の映画にもありましたように。若者の戦争関係の日記を、ここで見て、これに共通するものを感じたので、私も読んでもらいたい。ぜひ皆さんも「朝鮮人軍夫の沖縄日記」っていうのを、この今日のドキュメンタリーの映画に共通するものを感じましたので、見てほしいと思います。そして私は沖縄の沖縄のウチナーの人間です。戦後81年経てあの日本が再びこの映像の中にある戦争へと向かっているのではないかという恐怖を私自身が感じています。若者を、若者をこんな馬鹿げた戦争の駒として、私たちは使っているのか、そして戦争のもたらす不幸は国民。一般国民全体が引き受けなきゃいけない。すごい不幸なことなんだっていう、どんな人にも無関係ではられないっていうことを私は思い、「ぬちどう宝」の沖縄の先人の言葉を。この重みを今ほど私はしっかりと受け止めて考えていきたいなと思っています。ありがとうございました。

スタッフ：
（資料の説明など）

男性（E.M.）多摩地区

2回目（の発言で）で申し訳ないです。あの今の年表のことでちょっと補足をしたいことがありまして。明治7年からの台湾出兵と日清戦争のところで、私も知らなかったんですけども、沖縄が植民地としてアメリカの仲介で、日本と清国で二分割、もしくは三分割をされる寸前までと言いますか、二分割、宮古（島）海峡を境にして、西側を清国、東側を日本とそういうあの二分割にするようなまとまりつつあったのが、清国とロシアの領土問題に関係で、うやむやになりながら日清戦争に突入していったというのを私も本で知りました。

それからあのここに出てくる日中戦争が始まって、翌年国家総動員法ができますけれども、この国家総動員法はそれよりも20年以上前の第一次世界大戦の時に時の政治家とか軍部がヨーロッパの国家総動員体制を参考にしながら練りに練り上げて、軍人の永田鉄山の提案によって、国家平時から軍事に戦時に対してどのようにすれば速やかに国民を徴兵できるかということを提案してすべてのものを動員していく。それがあの緊急勅令で大日本帝国憲法にあった緊急勅令を使って。それを作ったという経過があります。もう一つ出てくるのが1925年の治安維持法ですね。治安維持法が（最高刑が）無期懲役から死刑に変わらずのも緊急勅令です。緊急勅令の話は、今出てきている緊急事態情報とか緊急政令あれと同じことです。非常に恐ろしい内容になってます。私も自分の父親のことを調べる中で見ました。あと瀬戸先生がかなり詳しい研究をされています。以上です。ありがとうございました。

男性（T.）国立市

私はあの自分の大学の先輩たちで、戦争で亡くなった人たちのことを調べて、学園祭で紹介しているのを約10年ぐらい続けています。たまたまの来週この週末13日、14日と国立の方でやりますので、一橋大学の国立キャンパスで学園祭がありますので、もしもご興味ある方はいらっしゃいましたら、ぜひおいでいただいたらありがたいです。とくに今回は日中戦争で亡くなった方々を取り上げてということでやりますので、その関係で今日はこの会があることを知って、参りました。来年が日中戦争90年の年にあたるので、この春の学園祭と秋の学園祭、両方で日中戦争を考えてみようとか、秋の学園祭にこの映画ができるのかなと、そういうことを考えて、偵察に参った次第です。

ただ、私どもの会はですね。調査する会ではなしに、あの戦没者を追悼する会で、そこにはいろんな方がいらっしやいまして、その歴史観といいますが、その例えば憲法についてもいろんな考え方の方もいらっしやいます。ご遺族もいらっしやいますので、そういう意味で何て言いますか、どちらかというと加害に焦点を当てて、何かを考えるというのが非常に難しい団体でございまして。そこをどういう風に今回、この映画はご遺族、ご遺族ではないんですが、その関係者のご親族の方も出て、どんな風に考えて、どういう映像になっているのかなというそういうことを知りたくてまいりました。今日は非常に勉強になりました。ありがとうございました。ぜひ上映を実現させてください。

女性 沖縄県大宜味村

今日の会に参加してとてもよかったです。原監督の先ほど紹介してくださった作品ですね。2021年の『夜明け前の歌消された沖縄の障害者』で、この著作、著書もあるんですけども、「私宅監置された無名の犠牲者たち」を伝えるっていう。その私宅監置された建物というか、コンクリートの塊のようなものが。今もある大宜味村というところから来ています。

あの皆さん、映画をたくさん見ていらっしやと思うんですけど、「憲法を考える映画の会」とかドキュメンタリー映画とか。去年、一昨年あたりの『国宝』という映画見た方いらっしやいますか？意外と少ない…ありがとうございます。じゃあ三上監督の『戦雲（いくさふむ）』を見た方いらっしやいますか？、こちらの方が多い。なるほど。ごめんなさい、話すのがちょっと下手なんですけど。

9月13日に沖縄県知事選があります。あの政治的なこと言わないでほしいって先ほどおっしゃってたんですけど、大丈夫ですか、本当ですか。多分1週間か2週間前に告示があると思うんですけども、今度の来週6月14日、デニー知事の事務所開きがあります。それで相手は自民党から多分出ると思われる古謝玄太さん、私より年下って昭和58年生まれ、42歳なんですけど。あのデニーさんは今回も、あの事件と言いますか、事故のこともあり、とてもネット上でも叩かれてまして、とても不利な状況です。だけど、この映画を見た、皆さんはいろんな学びもしてらっしゃるでしょうし、私より様々な経験があると思うのでわかるんですが、今回の選挙はマジでやばいです。落ちたとしたら古謝玄太さんは、この方の経歴を調べればわかるんですけども、総務省に働いて、去年はあの参議院議員参議院選挙落ちたので、その間ブラブラしてたら体裁が悪いから、那覇の副市長をやっていました。それで今回の多分9月の知事選に出ると思うんですけども、デニーさんを応援してほしいってはっきり言って、ここに皆さんに私はちょっとただの一個人というか、ただの市民なので村民なんですけど。

例えば、あの先ほどチラシにいただいたんですけど、次世代に伝え、沖縄戦対話の力を信じて、平良次子さんが。今度練馬にいらっしやいますね。6月28日、これもぜひ皆さんに行っていたきたいんですけど平良次子さんのお母様は平良啓子さん90おいくつだったんですけど、対馬丸で九死に一生を得て。いろんな経験をあちこちで語られてたんですけど、とても元気なお方でご近所に住んでたんですけど、お話を聞きたいな聞きたいな直接お話を聞きたいなと思ってたら突然亡くなったんですね。つい1週間前までお元気だったのにだから。次子さんはあのお母様からいろんなお話を聞いていると思いますし、新聞記事もいろんなインタビュー受けて、（琉球）新報、（沖縄）タイムズ、朝日新聞、毎日新聞もいろいろ載っているんでぜひ読んでほしいです。

皆さんは東京、関東に住んでいて、どのぐらい戦争が近づいているか危機感はどう感じているか、私にはわからないんですが、あの米軍基地があると絶対に、日本軍もそうでしたし、米軍基地があると必ず攻撃されるのは基地がある沖縄だと思います。あの神奈川に住んでいる方いらっしやったら、多分厚木基地だったり、横須賀基地。自衛隊の基地は全国にたくさんあると思います。

【次ページへ】

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（4）

〔前ページから続く〕それで辺野古は皆さんご存知かと思うんですけど、弾薬庫を作っておりまして、そこはすごい強固な形なんですね。普通の弾薬庫ではありえないぐらいの形で。（ベトナム）戦争中に核兵器が沖縄に置かれてましたけれども、その核を辺野古に置くんじゃないかと地元の人は危惧しております。

6月15日に最高裁の裁判に辺野古住民の方がいらっしゃいます。もしよかったら裁判に傍聴に来てください。辺野古の原告資格を争うためにわざわざ辺野古くんだりから最高裁までできます。金城武政さんなんですけど、その男性以外も何人か自分も原告になるって声を上げてくださった方がいたんですが、その方たちはことごとく原告ではないと勝手に裁判所から決められて、原告になることができませんでした。今度その一人辺野古から来る金城武政さんは、はっきり言って住所も辺野古にありますし、ずっと住んでいらっしゃった方なので、原告と認められていらっしゃいます。傍聴できる人数に多分限りがあるので、6月15日の午前中はそのヒューマンチェーンで最高裁の周りをまた別の件で皆さんで手をつないでぐるっとやると思うんですが、午後の2時ちょっと前に来た方がいいと思います。どのぐらいの人が来るかわからないけど多分抽選になります。

あと先ほどの話に戻ると9月13日の知事選があつて。お金がある方はぜひデニーさんの事務所に寄付してください。あの私も実は市民だけど、あの島ぐるみ会議「大宜見」に所属していろいろなチラシを配ったり、皆さんと同じようにいろんな活動普段しております。それで若い方たちがデニーさん支援のためにいろいろ活動してまして。「ゆんたくリビングカフェ」って言って沖縄県庁はあちこち皆さんが普段困っていることないかってお話を聞きながら、フリーマーケットとかいろいろやってるんですけど、そういうのも応援しています。それは全部全国からの支援でやってます。その成績的なことは出さずにやってるカフェなんですけど、そういうのも応援していただきたいです。そのこちらではいろいろ報道されないことも地元紙の琉球新報と沖縄タイムズでは、毎日のように記者が頑張って報道してくれています。その新報、タイムズには毎日のように載ってるんですけど、ネットでは驚かれてましたが、「戦争があるから避難しなさい」って言われて、段ボール箱か何かに自分の荷物をまとめて避難しろって言われたっていう沖縄県の沖縄島々の方だったかな。それを見てびっくりしたと思うんですけど、皆さんもそうやって避難しろって言われる時が来ると思うので。それをよく考えて、行動していただけたらと思います。ありがとうございます。

司会：

さっきの年表のところで、私ちょっと気がついたんですけど、あの「事変」とかそういう風になっている時に、あのなんていうかな「戦争」ってことを使わないっていうことがひとつはバリ不戦条約とか、それからあのアメリカのには中立法というのがあって、もし戦争という形になると、石油なんか売ってもらえなくなるとか、そういったこともある。そういうことで、もう戦争を使わないっていうね。そういうのもあったらしいですね。

男性（W.）国分寺市

1910年、明治43年のところで大逆事件が取り上げられていて、今回の研究の文脈からすると、**大逆事件をどういう位置づけで載せられているのか**ですね。ちょっと教えていただきたいと思っております。大逆事件のことを最近調べ始めたばかりで、どの人に聞いても、幸徳秋水がやらかしやつだぐらいしか意識がないもんですから、**もう少し多くの人に大逆事件の真相を知っていただきたいな**と思いがあるもんですから、お尋ねしている次第です。よろしく願いいたします。

花崎：

すいませんあの元にあった年表にあったんで、あのこのテーマとの関連というわけで選んだわけではないんですけども、今のお話にもありましたように、でもすごく結びついているものっていうのはあるかなっていうことが私も想像できました。それはまた教えていただければと思います。

司会：

では、あのトークシェアの方はこれまでにお話してもらいまして、最後にあの花崎の方から挨拶とあとこれからのことについてとお話しさせていただきます。

スタッフ：

トークシェアのまとめの話と次回の案内

【参加票に寄せられた感想など（1）】

●毎度面白い映画をありがとうございます。とても面白く良かったです。3人の日記から、色々な事がわかって興味深かったです。

「幕末太陽伝」「太陽を盗んだ男」が好きなんですけど最近好きになった「日本女侠传、侠客芸者」（藤純子、高倉健）に出てくる「チェスト」（若山富三郎が叫ぶ）という言葉が今日の映画に出てきてびっくり。陸軍大臣役の若山がわしの頭を張ったのは西郷先生とおとうと信次どん（藤純子）というセリフもあるんですが、サツマ出身の大正時代ぐらいの陸軍大臣でいい味出してるんですよ。

その若山が後半、芸者衆のお座敷登場（ストライキしていた）によるこんで「チェスト」と叫ぶのです。なんとなくニュアンスで意味がわかるのですがその言葉がこの映画に出てくるとは！

牛島満の孫の貞満さんが平和活動や司令部保存、公開運動してるけど、この映画に招待したら酷かしら。（いじめ、パワハラになるかな）本人もかなり牛島満のことを研究されてると思うけど。

習字を書くのも面白い。

親せきのMさんは生きて帰って来ただけ戦争いかんとは言ってたけど、大陸か東南アジアで何してたかは言わなかった。お袋のおやじさんも。

次は『父と家族とわたしのこと』（戦争PTSDの映画）見えないのでお願いします。

ちなみに「侠客芸者」はいい映画ですが憲法映画には向きません。あつ、でも少し軍隊批判してるかな。あとネトウヨにこそこの映画を見てほしいなあ。（T.A.）

●豹変と沈黙を2度目の鑑賞をしました。戦後80周年という節目の年にこのような映画が公開されることは大変意義深く価値のあることだと感じています。

私は中国残留孤児2世ですが、この映画で日本兵へのインタビューが実現したことは本当に貴重であると思いました。戦争の加害者として語られることの多い人々もまた戦争によって人生を大きく狂わされた被害者の側面を持っていることを改めて考えさせられた。

映画を通して戦争が人間の心や生き方を大きく変えてしまうこと、その傷が長い年月を経ても消えないことを強く感じました。だからこそ、この作品で語られている事実を一人でも多くの人に知ってほしいと思います。二度と戦争を繰り返さないために平和の大切さを考え続け、憲法9条の理念を守っていくことの（不明）を改めて感じました。（T.I.）

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（6）

【参加票に寄せられた感想など（2）】

●パレスチナ、ガザ、イラン攻撃等々テロ国家アメリカ、テロ国家イスラエルによる一方的な戦争が続いている。日本では自民党政府、高市政権が戦争の準備を進めようとしている。でも国会前に行くと、とても勇気づけられる。「憲法9条堅持」で、イインですね、と若い女性たちから励まされる思いです。国会前には女性、特に若い人が多い。今日のこの会場でも女性が多い若い女性が少ないのは残念。(Y.I.)

●●椅子の配置、画面見やすいようにしてあり、ありがとうございます。
●高市政権が進める戦争準備のための費用、労力、宣伝etc. これらを近隣諸国との友好関係構築に費してほしい。
●自分の子ども孫たち、年輩者も若者も日本の将来をしっかり考えよう。“偉い人に任せれば”は責任放棄だ。
●この映画は2回目の鑑賞でした。戦争の悲惨さ、殺す方の側の思い、それも客観的に受けとめる息子さん達の追求、言葉にできないものでした。(Y.I.)

●憲法を考える映画の会の上映会にはじめて参加しました。「南京大虐殺」の本も読んだことがあり、ある程度は日本が中国などにしたことを行っているつもりでしたが今回の「豹変と沈黙」を観ることができてよかったです。戦争になると人間性が豹変してしまうというテーマがよくわかりました。南京での虐殺はなかったとの情報操作もおこなわれ、さらにそんな歴史に興味はない、知らないという日本人も多いなか、映画を通して戦争に警鐘をならす会のとりくみを応援します。(H.O.)

●兵隊だった本人が描いた戦争の日記。書物で日本兵が何をしていたか、書物を読んだことはありますが、本人のものは初めて目にしました。それを書いた人の子ども息子さんが「いっしょにその罪を背負っていく」と活動をされている姿に胸があつくなりました。戦争の傷あとは何十年も続くことをあらためて思います。
とてもショッキングなことがらでしたが、見る機会をいただき、ありがとうございました。沖縄にもスタディツアーにいきましたが、中国・南京ぎゃく殺と、牛島満らの蛮行を、忘れず伝えていきたいです。(南京ぎゃく殺はなかったという人もいます!!なかで。(M.K.))

●中国・南京侵略軍の牛島満令下の部隊が沖縄に転戦し、沖縄人民を苦しめていたという事実を初めて知りました。そして今現在、高市政権が沖縄・南西諸島を対中国最前線基地に仕立て上げようとしていることに怒りを覚えます。(N.K.)

●「人間も死線を越えれば非道いもの」
侵略でない戦争などありません。
それでも日記という形であれ、よくぞ語って、よくぞ残してくださったと思います。私の亡父（昭和4年生）は、遂に何も語らず終わったことに比べれば、」遙かに立派です。
「中国戦と沖縄戦とは地続き」どころか、今この瞬間の現代社会とも地続きだと、つくづく思っております。次回も、何としても、参加します。(H.K.)

●とても貴重な映画を見せていただきました。戦争中、他人に言うこともできず自分と向きあって書き綴った日記から、戦争を読みとく、辛くはあるが皆さんに見ていただきたい映画だと思いました。(M.K.)

●1925年生まれ私の父は、2011年86歳で亡くなった。昨年生誕100年だった。軍人になり、前線に行く直前で敗戦となり、生き延びたと話していた。しかし父の生前本人の口から戦前・戦後・そして戦中の自分と世界の認識と感情の変せんなどを深掘りして聴くことはできなかった。
おそらく戦前日本の軍国教育に洗脳された価値観から戦後の民主主義への急激な変化に、まさに沈黙し続けたひとりだったのだと想像する。それくらい、私と父の間には深く暗い河のような分断がある。1957年生まれの私が、この河を少しでも理解し、今を生きる同世代と下の世代とも共感し合える社会を目指すことが、「沈黙しない地球市民」の責任だと考える。(E.S.)

●戦争は人類の最大の罪です。
日本は愚かにもまたその道を歩もうとしています。止めなくてはなりません。(K.S.)

●兵士の日記には、戦場の真実が浮かび上がってくる。侵略戦争なのか、自衛のための戦争なのかは判断がむずかしい、おまけに国は、プロパガンダで放送し。都合が悪いことは報道しない。現代のイラン戦争のトラブばかり。今日は観客がいつもより多い。戦争を現実的に考える人がふえているのかもしれない。(S.S.)

●フロアからの声でもあったが、「日記でたどる沖縄戦の道」という副題がやや不正確で、主題はむしろ中国戦線なのだが、それをタイトルに出すとネット右翼からのバッシングにあうのでそこを避けたのであろうか。
よい試みだが、構成がわかりにくく私はこの作品を見るのは2回目なのだがまだ消化できていない。
DVDにして頂いて、くり返し見たい。(R.T.)

●貴重な映像を見せていただき、有難うございました。
今また再び、暴支、ホウチョウの空気が大きくなっていくような気がしています。その先にあるものを何としても食い止めなければと思っています。(H.T.)

●素晴らしい映画でした。複数人の日記から、ときあかず物語で、複雑なので、もう一回見たいです。
ち密な日記が出てきて保存されているだけでもすごいですが、それが3人の方(4人の方?)の分ある。というのがすごいです。
その資料を又、子孫の方々が読みとき、原地にも行き、書かれたこと、書かれなかった事の検証(うのみにする、だけでなく)していく、考え直して行く悩み(語り合)姿がすごくヒントになりました。私は『黒川の女たち』よりも、たくさんの人に戦争の真実・読みとくヒントを与えてくれる、いい映画と思いました。年表も素晴らしく、「明成皇后暗殺事件」等知らない用語多いので助かりました。(M.N.)

●原義和監督のビデオメッセージがとても良かったから中国戦線から沖縄戦へ(不明)が移動してきたことをわかりやすく説明していただきました。(不明)沖縄戦を主体とした勉強をしていきたいと思います。(H.N.)

●先日TVで「少年A」を観たが、スパイ防止法の恐さが身近に感じられたので、今みる映画ではないかと思った。(R.N.)

●田中信幸さんという方の生き方が映画を見終って一番心に残りました。冷静に事実と向かい合っておられるその立ち姿に学びたいと思いました。
日記を丁寧読み解いてとても見やすい形で提示されていて、韓国や中国に取材に行かれたり並々ならぬ努力を重ねて完成された作品を拝見でき、とてもありがたかったです。(M.N.)

●戦争を肯定する今起きている風潮、潮目を変えるために貴重な映画会の企画にエールを送ります。(R.K.)

資料⑬ 第88回憲法を考える映画の会（豹変と沈黙） 報告および参加者感想から（7）

【参加票に寄せられた感想など（3）】

●戦中に日記を書き続けられたこと、それを取りあげられることなく持ち帰ってこられたことにおどろきます。日本の戦争責任の一証査として国の資料庫に永久保存し、後のために学びの素材として利活用すべきなのではないか。（M.H.）

●このような会があることを初めて知りました。政局動行が不安な今日、日本の侵略戦争の記憶やと記録を今一度ふり返り語りつがなければならないと思いました。（A.H.）

●重い映画でしたが、とても心に響くものがありました。ご本人（戦場に行った人）の息子さん達自身が調べたり、想像したりして、とても説得力があると思いました。ご本人達の戦場での思いも想像できました。牛島満の沖縄での蛮行は大まかに知ってましたが、中国の時から具体的な内容を知ることができました。年表についての説明も良かったです。「父と私と家族たち」を思い出しました。ありがとうございました。（Y.M.）

●上映会の前日に友人からのメールで知り、即予定を変更して、こちらに来ました。見る前からワクワク期待がつのります。戦後81年経て、日本は再びこの映像の中にある戦争へと向かっていることに恐怖を感じます。若者をこんな馬鹿げた戦争の駒として使っているのか？戦争のもたらした不幸は、国民（一般）が最も引き受けさせられる事。どんな人も無関係でいられない。“命どう宝”沖縄の先日の言葉の重みを今こそ考えたい。（E.M.）

●●中国人を殺したことや慰安所に行ったことが書いてあるお父様の日記を公開されたり、お父様の日記には書かれていない、当時のお父様の気持ちをきいたり、戦争についての認識をたずねたりと映像として残された勇気と誠実さに感謝したいと思います。

●原監督のビデオメッセージで牛島満の「チェスト、行け」の書が鹿児島神社に奉納されているというお話は貴重でした。

●「中国の部隊が沖縄戦にも関与している」とはよく言われますが、それがよくわかりました。

●関東大震災の時の戒厳令の部隊も司令官も部隊も朝鮮体験を持っていたという慎蒼宇先生のご研究がありますが、それと同じだな…と思いました。

●原監督はEテレで沖縄の私宅監禁の番組を見て以来、注目している監督さんで、可能な限り映画やドキュメンタリーは見るようにしています。（H.M.）

●戦争を推しすすめている人、それを支持する人特に若い人にこそ見てほしい映画だと思います。戦場で人はどのように豹変するかを知ってほしいです。戦争責任を明確にできないこの国の将来が不安です。（E.Y.）

●◎いつも時代の状況と機敏に対応した映画の上映を続けてくださりありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

◎戦陣日記に着目したのはよい観点だと思いました。そしてそこにリアルな戦争の状況が書かれていることは、戦争の実相を未来に伝えていくために貴重な資料になると思います。同時に何が書かれていないのか、書くことができなかったのかを問うていたことも大事なことだと思います。

◎トーク形式もよいと思います。講演会などでは「質問」だけですが今回のように映画を巡る話しやその周辺の草の根の活動の状況を知ることができてとても勉強になりました。◎手元資料がいつも充実していることに感心しています。これを読むだけで、とても理解が深まり、勉強になります。スタッフの皆様の多大なご努力に感謝致します。（K.Y.）

●2週間前に、映画。父と家族とわたしのことをみて戦争トラウマのことを知りました。川越スカラ座で。

今回の映画でも知らなかった歴史、史実、同時に真実がまだ埋もれているようです。良い映画の上映ありがとうございます。

ペリリュー島の映画の上映を。楽園のゲルニカ。アニメなので若い層もみやすいのではないのでしょうか。（H.W.）

●当事者の語った、つづった事実、戦後80年過ぎた今までの当たり前にした、今。

何とも生々しい。辛い…

ただ、会場には若い方はいらっしゃらず…

大学などなどで上映会がおこなわれることを願います。（Y）

●人を殺す事、殺される事が日常となって、それに一つ一つ対応しては、生きていかれない日常が軍隊という所ならば、そういう所を造らせない。

だが現実には国を守るという美しい言葉により若い人はもとより、国民全部がそれに加担してゆく。そうせざるを得ない状況を作らせないことに、全精力を傾ける。そういう風に、今の世の中になっているのか。国を守る事＝我等市民を守る事とは違うようだし、本当にどうしたら、良いのか。わからなくなる。（無記名）

●よく日記、親子、親属（？）を見つけましたね。

東亜同文書院の後身（映画では同文書院で学んだ先生方がつくったと言ってましたが）の愛知大学で中国語を学びました。日本と中国の友好のために、中国語を学び、使うことを叩き込まれた？心がけてきました。

戦争というものが人間をどの様に壊してしまうのか。

日本人が日本が、でなく、世界の人間というものとといった観点から考えないと沈黙を招いてしまうのかなと思いました。

一兵士に重荷を負わせるのは酷。牛島という人もどうしてこういう人ができてしまったのか…鹿児島という土地、歴史的背景、負の（不明）勉強しダメですね（無記名）

●“日記でたどる沖縄戦への道”という副題がついているがその筋連をもっとはっきりと分かるように出してほしかった。もう一度見ないとわからないのかとも…（無記名）

●日記を付けていたことがある。しかし、他人（ひと）に読まれても大丈夫な書き方をしていた。私の性格だろうか？

（カッコつけ）

この映画に出てくる4人の日記は赤裸々である。そのままなのだ。だからくるものがある。だが、武さんが戦後書いた農夫との会話は贖罪ではないのか？田中信行さんの「あなたが参加した戦争は——」との父への問答はいいね。（O.K.）

〔FAXによる回答〕

*「原義和監督のビデオメッセージ」、「トークシェアの発言」、また「参加票」に書かれたご意見など、書き起こしの過程でよく聴き取れなかったところや達筆で読み取れなかったところがあります。もし間違っていたり、発言意図を取り違えていたところなどがありましたらどうぞ教えて下さい。（宛先：hanasaki33@me.com）

この資料はホームページなどにも掲載し、多くの人に読んでもらって考えてもらおうと思いますので、間違いがあったら、随時正しい形に直していきます。よろしくお願いします。

これからの憲法を考える映画の会

第90回 憲法を考える映画の会

日時：2026年10月18日（日）13：30～16：30

会場：文京区民センター3 A会議室

映画：『新・戦場の兵士』（予定）

次回10月の「憲法を考える映画の会」の上映候補作として『新・戦場の兵士』があがっています。



『琉球弧を戦場にするな』など制作監督した藤本幸久さん・影山あさ子さんの新作です。

辺野古、南西諸島の自衛隊基地、数々の軍事演習など、戦争と戦争の準備、そしてそれらに反対したたかう人々…。そのリアルを私たちに伝えてきた彼らの新作を見て、そもそも軍隊とは何か、その中で兵士はどういう思いで戦争を見ているのか、考えて行きたいと思います。

明治の時代から1945年の敗戦まで、日本は植民地拡大と戦争に明け暮れました。そしてアジア太平洋戦争では、300万人を含む2000万人は犠牲となりました。

以来80年、戦争をしないと決めたはずの日本で、「台湾有事は日本有事」という言葉と共に、今、着々と次の戦争の準備が進められています。80年前の戦争と比べても、格段に進化、強化された兵器による戦争が起これば、計り知れない被害を生むことでしょう。

いつの時代も、どの戦争でも、最前線に立たされるのは若者たちです。若者たちは、自分たちの未来をどのように選べばよいのでしょうか。

『戦場の兵士』は、日本とアメリカの兵士たちの体験を描きます。

本当の戦場とはどのようなものなのか、兵士はどのような体験をするのか。そして、兵士にはたたかう以外の選択肢はないのでしょうか。

近藤一さん、アレン・ネルソンさん、ジェフ・パターソンさん、彼らの体験の中に、未来への手がかりがあります。彼らの声にどうぞ、耳を傾けて下さい。

「新・戦場の兵士」 監督 影山あさ子

憲法を考える映画の会をあちこちで

「戦争をさせない」「改憲を許さない」ためにも、あちこちで話し合いの機会をもちましょう。

映画と一緒に見ることで一緒に考え、話しあう場があちこちで作られることの役に立てばと考えて、「憲法を考える映画のリスト」をつくりました。最新版、2026年版を活用下さい。

1冊600円です。

憲法を考える映画の会の上映会場にて販売。

郵送でお求めの方は、郵送料を含め1000円です。手元資料表紙の連絡先（E-mailにお申し込みください！



上映会・催しの案内

8月30日（日）14時～ 『市街戦のジャズメン』 問合せ：090-3433-6644（稲塚）（文京区民センター＝地下鉄春日駅）

8月30日（日）15時～ 『原発の町を追われて～双葉町の15年』 堀切さとみさんのトーク<https://www.jtgt.info/?q=node/3859>（谷中の家＝西日暮里駅＆オンライン）

8月31日（月）18時～ 歴史に誠実に向き合い、国家の責任を問い、再発を許さない共生社会への歩みをと共に！関東大震災朝鮮人・中国人虐殺103年犠牲者追悼大会（明治大学＝御茶ノ水駅）

9月1日（火）11時～ 関東大震災103周年 朝鮮人犠牲者追悼式典 虐殺された朝鮮、中国の人、日本の社会運動家を追悼します（横網町公園＝JR両国駅）

9月2日（水）14時～ 平和人権ロードショー『橋のない川』第一部16mmフィルムによる上映（立川市錦公民館＝JR立川駅）

9月3日（木）13時半～ 法廷警備員の暴力を許さない石垣裁判」を支援する講演会「憲法学から見た日本の司法」清水雅彦さん（浦和コミュニティセンター＝JR浦和駅）

9月5日（土）10時半～ 平和人権ロードショー『隠された爪跡』16mmフィルムによる上映（立川市錦公民館＝JR立川駅）

9月2日（水）14時～ 平和人権ロードショー『橋のない川』第一部16mmフィルムによる上映（立川市錦公民館＝JR立川駅）

9月15日（火）19時～ VIDEO ACT！上映会 ～水俣病公式確認から70年～ 上映作品『しえんしゃたちのみなまた』東京ボランティア・市民活動センター＝JR飯田橋駅）

9月19日（土）14時～ 『憲法を武器として 恵庭事件知られざる50年目の真実』第80回文京上映会（文京区民センター＝地下鉄春日駅）

9月20日（日）13時半～ 『君が代不起立』羽村上映会根津公子さんのお話（羽村市生涯学習センター＝青梅線羽村駅）

9月22日（火・休）11時～ 福島映像祭2026（1日目）：『Fukushima Reporters』『飯館村 わたしの記録』『波打ち際に足跡を残す』（日比谷図書文化館 日比谷コンベンションホール＝地下鉄霞が関駅・内幸町駅）

9月22日（火・休）14時～ カネミ油症を“忘れない”事件から58年『母と子の絆～カネミ油症の真実』（文京区民センター＝地下鉄春日駅）

9月23日（水・休）11時～ 福島映像祭2026（2日目）『原発事故報道15年を振り返る』『三角屋の交差点』『波打ち際に足跡を残す』（日比谷図書文化館 日比谷コンベンションホール＝地下鉄霞が関駅・内幸町駅）

9月30日（水）13時半～ 「憲法映画祭」～観て考える憲法の未来～ 『戦争のつくりかた』『戦争をしない国 日本』『映画 日本国憲法』申込み締切9月7日 TEL:03-6233-7607パルシステム東京（会場＝東久留米市成美教育文化会館グリーンホール＝西武池袋線東久留米駅）